『隋書』西域伝、『周書』異域伝（下）の訳注

小谷仲男
菅沼愛語

目次

訳者のまえがき……52
『隋書』巻八十三西域伝……56
『周書』巻五十異域伝（下）……88

訳者のまえがき

『新唐書』西域伝（小谷・菅沼二〇一〇、二〇一一）にひきつづいて、今回は『隋書』西域伝と『周書』異域伝（下）の訳注を作成した。『隋書』（唐・魏徴等撰）と『周書』（唐・令孤徳棻等撰）の編纂はほぼ同じころに着手され、貞観十年（六三六）同時に完成した。『北斉書』（唐・李百薬等撰）も同時に完成したが、西域に関する列伝は作成されていない。北周の統治は西暦五五六～五八一年、隋は五八一～六一八年と次の唐朝約三百年と比較すれば、短命な王朝であった。この両朝は中国中世の長い分裂時代の最後に位置する。中国の国内が分裂し、内部で対立しあうことになれば、対外政策はどうしても消極的にならざるを得ない。この分裂から統一への過渡期において、西域政策そして西域の歴史がどのように変化するかは興味深い。

北周、北斉が華北を二分して交戦していた時、両国とも北方遊牧民族の突厥に支援をもとめ、競って多額の贈物を提供し、皇女を差し出して婚姻関係を結んだ。当時の突厥他鉢可汗は「ただ、わが南方に二人の孝行息子がいるかぎり、どうして物の不足を憂うことがあろう（但使我在南両箇児孝順、何憂無物邪）」（『周書』突厥伝）と豪語したという。しかし、まず北周が北斉を併合して華北を統一（五七七年）、ついで北周をついだ隋が南朝の陳を併合すると（五八九年）、ふたたび中国に政治的統一がもたらされた。中国に統一王朝が出現すると、東アジアにおける南北の力関係は次第に変化しはじめる。しかしまだ全国統一したばかりの隋は、南北をつなぐ大運河の改修、万里の長城の改築など統一維持のための大事業を抱えていた。武力を行使して突厥を圧倒する余力はなかった。隋の文帝と煬帝、そのもとで外交を担当する裴矩とは、むやみに武力をもちいず、策略によって突厥勢力を分断する方針をとった。そのためには情報収集が必須であった。裴矩は辺境視察のため、何度か張掖、敦煌に派遣された。そうしたなかで製作されたのが裴矩撰

『西域図記』三巻と韋節撰『西蕃記』であった。『隋書』巻六七裴矩伝、『旧唐書』巻六三裴矩伝には次のように記される。

大業初（六〇五～六年）当時、西域諸国の人びとは張掖（甘粛省）の中国人城塞を訪れ、交易をしていた。煬帝は裴矩を張掖へ派遣して交易事務を管掌させた。裴矩は皇帝が将来、対外政策を拡大し（遠略）、北方遊牧民族を平定したい（欲吞併夷狄）と考えていることを知り、その機会に西域諸国の風俗、地理・地勢（山川険易）、君長や名族、物産や服飾について聴取・観察した。それにもとづき、『西域図記』三巻を著述し、皇帝に献上した（『旧唐書』巻六三裴矩伝）。

なおその序文によると、取り上げた国数は四十四、それぞれの国の服飾儀礼、国王・庶民の容貌を模写した彩画図を付し、それとはまた別に戦略上の要害を印した地図を作成したという。『西域図記』の完成年については正確な記載がないが、内田吟風の研究によれば、大業二年（六〇六）とするのが妥当である（内田吟風一九七三：一一二）。残念ながら本書は宋代には散逸してしまい、現在では若干の断片が引用文献から知られるのみである。ただ、その序文全体は『隋書』裴矩伝に載せられており、同書「西域伝」序の冒頭もその一部である。したがって本書が西域伝の主要な材料になったことは明らかである。

同じく『隋書』西域伝の主要な情報源になったものに、韋節の『西蕃記』がある。しかしこの書も散逸し、『通典』辺防などに一部分が引用され、保存されるにとどまる。『隋書』西域伝の序に「煬帝時、遣侍御史韋節、司隷従事杜行満、使於西蕃諸国」と記しているのがそれである。ただ、韋節と杜行満らの出発・帰国が煬帝治世の何年であったかの明言がない。煬帝は大業六年（六一〇）に西方巡行に出かけ、そこで西突厥可汗の処羅と面会しようと試み、それは実現しなかった。その時、韋節が可汗のもとに招致に派遣されているので、そのころ、かれらは西域への出発準備中か、その途上にあったのではないだろうか。裴矩の『西域図記』の情報にもとづき、実地検証の旅に出たと考えられる。

『隋書』西域伝の波斯国（ササン朝ペルシア）条には、煬帝が朝貢を促す使者として李昱を派遣したことが記されているが、李昱も韋節と同じ一行のメンバーであった可能性がある。一行はそれぞれ分担してペルシアやインドを含む西域諸国を歴訪し、情報の収集にあたったとおもえる。『通典』辺防、嚈噠（挹怛）条につぎのような『西蕃記』の一文が引用されている。「韋節『西蕃記』云。親問其国人、並自称挹闐。（韋節がその国の人たちに直接たずねると、みな口をそろえて自分たちはエフタル（挹闐）であるという。）」エフタルについてさまざまな漢字表記、出自説があり、韋節は現地でエフタル人をつかまえ、当人たちが実際に何と発音しているか確かめたのであろう。（アフガニスタンの西北部バダフシャンには現在にもヤフタルという地名が残っている。小谷仲男一九六六：四〇〇～四〇二）『隋書』西域伝にはそのような現地に赴いて収集した材料が含まれており、その内容には前代に見られない新鮮さがある。しかし、そうした情報収集の第一の目的は先に述べたとおり、北方の遊牧民族、とりわけ突厥の動静をさぐるためのものであった。

次に『（北）周書』異域伝について述べる。北周書の外国伝に関する列伝は巻四十九、異域（上）と巻五十、異域（下）のみである。東夷、南蛮伝に相当するものが異域（上）、北狄、西戎・西域伝に相当するものが異域（下）に載せられる。今回、訳注したのは異域（下）の突厥を除いた残りの吐谷渾から波斯国（ササン朝ペルシア）までの十カ国である。突厥を除いたのは、それが北狄に属するのと、すでに山田信夫（一九七二：二九～三八）の訳注が存在するからである。なお、異域伝全体に付された序と、巻末の「史臣曰」は今回の訳注に加えた。『周書』の取り上げる西域十カ国は、『隋書』西域伝の二十三カ国に比べて半数にも満たない。やはり中国中世の分裂状況を反映したといえる。その中にあって「吐谷渾」が他国に比べて詳細なのが特異である。隋が南朝最後の陳を滅ぼした時（五七七年）、一番大きな打撃を被るのが吐谷渾である。吐谷渾は青海地方に拠点を置く牧畜生活の民族で、地の利によって青海から鄯善（ローラン）へ、また青海から河西回廊（甘粛）へ、さらにそこから江南の南朝へと通ずる独自の交易ルートを開拓し、

それを掌握していた。河西回廊から北朝に行くことも容易であった。背後にはのちの吐蕃（チベット）が控えていたはずであるが、吐谷渾が健在である限り、シルクロード交易には参加できない。北魏から北周の時代が吐谷渾の全盛期であった。

この吐谷渾に深い思い入れを持って歴代正史の吐谷渾伝を英訳したのが Molè, Gabriella (1970) である。そこには『北史（周書）』、『隋書』吐谷渾伝の訳注が含まれる。また、『周書』異域（下）については、Miller, Roy Andrews (1959) の英訳がある。それは異域（下）の突厥、吐谷渾を除く、残り九カ国について訳注したものである。Miller は翻訳に取り組んだ理由を、中国人が書き記した西域諸国の珍しい記事そのものよりも、そこに反映する中国人の伝統的歴史観のほうにより興味がひかれると説明する。私たちも中国正史の西域伝を訳注しながら、それが私たち外国人にとって中国人の歴史観や世界観を、またその変化を知る格好な史料であると実感するので、その見方には同感である。Miller が翻訳の底本にしたのは百衲本であった。テキストの校勘に苦心したというが、まだ中華書局の『周書』が出版されていなかった時期である。今、中華書局本『周書』異域（下）の校勘記と『隋書』のそれと比較すると、『周書』校勘記のページ数が圧倒的に多いことに気づく。

今回の訳注にあたって私たちが使用したテキストは前回と同様に中華書局出版の標点本（隋書一九七三年版、周書一九七一年版）である。そのほか『歴代各族伝記会編』第二編下、中華書局出版一九五九年、『中西交通史料彙編』第五冊、世界書局一九六九年、余太山撰『両漢魏晋南北朝正史西域伝要注』中華書局出版二〇〇五年を参照した。

『隋書』巻八十三西域伝

『隋書』西域伝訳注細目

西域伝序

1 吐谷渾（とよくこん）
2 党項（タングート）
3 高昌（トルファン）
4 康国（サマルカンド）
5 安国（ブハラ）
6 石国（タシュケント）
7 女国
8 焉耆（カラシャール）
9 亀茲（クチャ）
10 疏勒（カシュガル）
11 于闐（ホータン）
12 鏺汗（フェルガナ）
13 吐火羅（トカラ）
14 挹怛（エフタル）
15 米国（マイムルグ）
16 史国（キッシュ）
17 曹国（イスティーカーン）
18 何国（クシャーニーヤ）
19 烏那曷（アンフォイ）
20 穆国（アームル）
21 波斯（ペルシア）
22 漕国（カーピシー）
23 附国（プー、ピャーユル）

西域伝序

前漢の時代になって、初めて中国と西域との通交が開かれた。当初、西域諸国は三十六国であったが、その後、五十五の王国に分立した。前漢は西域に校尉と都護の官職を設置し、鎮撫にあたらせた。王莽が帝位を簒奪すると、西域諸国との通交は杜絶した。後漢時代になると、班超が通交を開いた西域諸国は五十国あまりとなり、西は西海（インド洋・地中海）にまで達し、東西は四万里、その間の諸国がみな朝貢にやってきた。そこで再び都護および校尉を設置し、共同して西域の統治にあたらせた。その後、西域との通交は杜絶したり、開通したりの不安定な状況となり、後漢朝廷は西域との通交が中国にとって重荷となることから、西域の官職も時に廃止し、時には復活させるという事態となった。魏晋以降になると、西域諸国は互いに併呑、攻滅しあい、詳細に記述することができない（『西域図記』序、『隋書』巻六七裴矩伝引用）[1]。

隋煬帝の治世（六〇四～六一八）になると、煬帝は侍御史の韋節と司隷従事の杜行満を西域諸国に使者として派遣した。かれらは闕賓（ガンダーラ・カシミール）に至って瑪瑙杯を入手し、王舎城（ラージャグリハ）では仏教経典を入手した。また史国（キッシュ）で舞女十人、師子（ライオン）皮、火鼠毛（アスベスト）を入手して帰還した。煬帝はまた聞喜公の裴矩に命じ、武威と張掖の間を往来し、そこを訪れる西域の人々を中国へ誘致させた。

当時、西域には君長（国王）を有する国が四十四存在した。裴矩はそれらの使者が中国に朝貢するさいに多大な利益をむさぼらせ、朝貢が有利であることを互いに言いふらさせた。大業年間（六〇五～六一七）には、連れだって朝貢に訪れる諸国の使者が三十餘国にのぼり、煬帝は西域校尉を設置して使者の応接にあたらせた。その後まもなく、中国は大乱状態となり、朝貢はついに途絶えてしまった。しかも西域関係の記録が多く亡失し、今、記録の存在するものは二十国のみである。

注

（1）裴矩については『隋書』巻六七裴矩伝を参照。彼の著述した『西域図記』三巻（宋代に散逸）については、内田吟風一九七三：一一五～一二八を参照。

吐谷渾（とよくこん）

吐谷渾は、もともと遼西の鮮卑の徒河渉帰の子である。渉帰には二人の子があり、長男が庶子の吐谷渾、嫡子が次男の若洛廆[1]であった。渉帰が亡くなった後、若洛廆が継承して部衆をすべた。これは慕容氏であった。吐谷渾と若洛廆は仲が悪く協力できなかったので、吐谷渾は西に移動し、隴（隴山）を越えて、甘松山（甘粛省）の南、洮水の西、南は白蘭山に限られる数千里の地にとどまった（現在の青海省東部）。その後、吐谷渾の名をとって国名とした。北魏から北周にかけての時代に、吐谷渾ははじめて可汗を称した。伏俟城を都とした。それは青海の西十五里の地にあった。城には城郭はあったが、吐谷渾人はその中には住まず、水と草を追い求めて移動した。官職には王公、僕射、尚書、郎中、将軍があった。国王は黒絹の帽子をかぶり、妻は金の花を頭に戴いた。その武器・衣服は中国とほぼ同じであった。王公や貴人は多く羃羅（べきら）を頭にかぶり、婦人は裙襦（パンタロンと丈の短い上着）を着て辮髪にし、珠貝をつづって髪を飾った。その国には常税がなかった[2]。殺人を犯したものと馬を盗んだものは死刑に処され、それ以外の罪を犯したものは物を徴発されて贖罪した。風俗は突厥と非常に似ている。喪服の制度があり、葬儀が終わると服喪の期間も終了した。吐谷渾人の性格はみな貪欲で残忍であった。大麦、粟、豆を産した。青海は周囲が千餘里で、その湖中に小山があり、その国の習俗では冬になると雌馬を小山の上にはなち、龍種の駒を得ると言われた。吐谷渾はかつて波斯（ペルシア）の草馬を手に入れて青海にはなち、それで驄（あしげ）の駒を産ませた。その駒は一日に千里を行く事が

できた。それでこの駒を「青海驄」と言った。犛牛（ヤク）が多く、饒銅、鉄、朱沙（朱）を多く産した。その土地は鄯善（ローラン）、且末（チェルチェン）を兼併していた。西北には流砂が数百里あり、夏には熱風が吹いて、旅人を傷つけ死亡させた。砂風が吹く時、老いたラクダがあらかじめこれを察知し、首を引いて、いななくと、他のラクダが集り、口と鼻を砂の中に埋める。人はこれを見て熱風の到来を察し、絨毯で口と鼻をおおって熱風の災いを避けた。

吐谷渾の王の呂夸（位：五三五～五九一）は、北周時代にしばしば辺境に侵攻した。隋の開皇初年にも兵を率いて弘州（甘粛省）に侵攻した。高祖（文帝楊堅）は、弘州の地が広漠としていて人も荒々しいので、弘州を廃止した。そして文帝は上柱国の元諧に歩兵・騎兵数万を統率させて吐谷渾を討伐させた。賊（＝吐谷渾）は国中の兵を徴発してこれを迎え撃ったが、曼頭から樹敦[3]に至るまで吐谷渾の甲騎（＝鎧づくめの騎兵）がとだえなかった。吐谷渾の河西総管、定城王の鍾利房、太子の可博汗が、あい前後して応戦し、隋の軍勢を拒んだ。元諧は何度も吐谷渾軍を撃破し、捕虜・斬首は甚だ多かった。呂夸は大いに恐れ、親衛隊を率いて遠くに逃亡した。吐谷渾の名王（異姓の王族）[4]十三人は、各々の統べるところの部落を率いて降服した。文帝は、高寧王の移茲裒が吐谷渾人の人望を得ていたので彼を大将軍となし、河南王に封じて降服した吐谷渾人を統べさせた。その他の吐谷渾人にもそれぞれ官職・賞与を与えた。しかし、これより何ほども経過しないうちに吐谷渾がまた侵攻したので、旭州刺史の皮子信は出撃してこれを食い止めた。けれども賊（＝吐谷渾）によって撃破され、皮子信は戦死した。汶州総管の梁遠が、精鋭を率いて吐谷渾軍を撃破し、千餘の首級をあげると、吐谷渾は奔走した。しかし吐谷渾がまた廓州に侵攻したので、廓州の兵がこれを撃退した。

呂夸は吐谷渾王の位にあること百年であったが、しばしば喜怒哀楽によって太子を廃して殺害した。その後、太子は廃されることを恐れ、呂夸を捕えて隋に降服しようと謀り、隋の辺吏に援軍を要請した。秦州総管の河間王弘は兵を率いて吐谷渾太子に呼応しようと許可を求めたが、文帝はこれを許さなかった。太子の陰謀は露見し、父の呂夸に殺され

た。呂夸は末子の鬼王訶を太子にした。畳州刺史の杜粲は、その隙に乗じて吐谷渾を征伐したいと請願したが、文帝はこれも許さなかった。開皇六年（五八六）、鬼王訶は父親から誅殺されることを恐れ、部落一万五千戸を率いて隋に帰順しようと謀り、使者を朝廷に派遣し、軍隊を出して迎えに来てくれるように請願した。文帝は侍臣に向かって、「吐谷渾の風俗は中国と異なる倫理観であり、父には慈愛の心がなく子もまた不孝である。朕は徳をもって人に諭している。どうして悪逆をなすものを助けようか。私は当然、道義をもって彼らを教化するだけである」と言った。そして、鬼王訶の使者に向かって言った。「朕は天より命を受け、四海を撫育してきた。すべての人民を仁義によって、お互いに向き合わせる事が朕の望みである。まして、父子としての天性があれば、どうして互いに親愛しないことがありえようか。吐谷渾の王は鬼王訶の父であり、鬼王訶は吐谷渾の太子である。父親に不正があれば、子がこれを諫めるべきである。もし子が諫めても父が従わないのであれば、近親や親戚や内外のものに命じて遠まわしに諭させるべきである。それでもだめなら、泣いて王を導くべきである。人にはみな情が備わっており、必ず感じ入り悟るはずである。密かなはかりごとや非法によって、不孝の名を受けるべきではない。あまねく広がる天のもと、みな、すべて朕の臣妾である。各々が善事をなせば、朕の心に叶うのである。鬼王はすでに親愛の情があって、朕に投降したいと望んでいる。朕はただ、鬼王を教化して臣下・父子としての法をなさせたいだけである。遠方に軍隊を派遣して悪事を助けるようなことはできない。」文帝の言葉を聞いて、鬼王訶は隋への帰順をやめた。開皇八年（五八八）、名王の拓拔木彌が千餘家を率いて帰化したいと請願してきた。文帝は言った。「あまねく広がる天のもと、みな朕の臣下である。荒遐を服属させたといっても、いまだに風教を知らない。朕の撫育は仁と孝を根本にしている。吐谷渾の賊は暗く狂っている。妻子は恐怖をいだき、ともに隋への帰化を希望し、自ら危亡を救おうとしている。しかし、夫に叛き父に背くものを受け入れるわけにはいかない。また、その本意が、まさしく自ら死を回避することになるならば、もしいま拒めば、これもまた不仁であ

る。もし、もう一度請願してくるならば、朕はただ慰撫するにとどめよう。そして彼ら自身で解決することに任せ、軍隊を出撃させて応じる必要はない。吐谷渾王の妹の夫や甥が自発的に来たいと望むなら、その意に任せるのがよい。こちらから進んで亡命するように誘わない。」

この年、河南王の移茲哀が亡くなったので、文帝は河南王の弟の樹帰に命じて河南王の衆を統べさせた。隋が陳を平定する（五八九年）と、その後、呂夸は隋のことを大いに恐れ、険要の地に逃亡し、決して隋に侵攻しようとはしなかった。

開皇十一年（五九一）、呂夸が亡くなり、息子の世伏[5]が即位した。世伏（位：五九一～五九七）は兄の子の無素を派遣し、表を奉って藩屏と称し、特産物を献上して娘を後宮に献上したいと請願してきた[6]。文帝は、傍にいた滕王に向かって言った。「これは至誠（まこと）ではない。ただ計を急いでいるだけである。」それから文帝は無素に言った。「朕は吐谷渾の王が娘に命令して朕に仕えさせたがっていることを知っている。しかし、もし、吐谷渾王の請願を認めて娘を後宮に入れたならば、他の国もこれを聞いて、このようなやり方を真似しようとするであろう。一つを許し、一つを却下する。そんなことをしたら不公平というものである。もし、みなの請願をすべて許したならば、これは良い方法ではない。朕の希望は、彼らが安養に自在に生きることにある。どうして娘を集め納め入れて後宮を満たすことができようか。」そう言って文帝はとうとう無素の請願を許さなかった。

開皇十二年（五九二）、刑部尚書の宇文弼を遣わして吐谷渾を慰撫した。開皇十六年（五九六）、光化公主を世伏に降嫁させた。世伏は上表し、公主のことを天后と称したいと言ったが、文帝は許さなかった。

翌年、吐谷渾内で大乱がおこり、国人は世伏を殺害して弟の伏允を吐谷渾王にした。新王の伏允（位：五九七～六三五）は使者を派遣し、王を廃立したことを陳述し、専命の罪を謝し、彼らの風習に従って光化公主を妻にしたいと請願

してきたので、文帝はこれを許可した。[7] これ以後、吐谷渾からの朝貢は毎年行われ、国家（隋）の様子を聞きただしてきたので、文帝はそのことを非常に憎んだ。

煬帝が即位すると、伏允は息子の順を入貢させた。このころ、鉄勒（テュルク）が塞を攻めてきたので、煬帝は将軍の馮孝慈を敦煌から出撃させ、鉄勒の襲撃に備えさせた。馮孝慈は、戦ったが敗北した。鉄勒が使者を派遣して煬帝に謝罪し降服を願ったので、煬帝は黄門侍郎の裴矩を遣わして鉄勒を慰撫させ、そして鉄勒に吐谷渾を攻撃して誠を尽くすよう遠まわしに諭させた。鉄勒はそれを承諾し、兵を率いて吐谷渾を襲撃して大いにこれを打ち破った。伏允は東に逃走し、西平の国境地帯を保持した。煬帝はまた観王雄を澆河より出撃させ、許公の宇文述を西平から出撃させて観王を援護させて大いに伏允を破った。伏允は遁走し、吐谷渾の部落のうち来降するものは十万餘人、六畜は三十餘万頭にも及んだ。宇文述は時をおかずに伏允を追撃したので、伏允は恐れ、南に逃走して山谷の間に逃げ込んだ。[8] このため吐谷渾の故地は空となり、西平の臨羌城以西、且末以東、祁連山以南、雪山以北の、東西四千里、南北二千里は、みな隋の領地になった。煬帝はその地に郡県と鎮戍を設置し、天下の罪の軽い罪人達をその地に移して住まわせた。[9] 煬帝は、順を隋に留めて吐谷渾に帰さなかった。一方、逃亡した伏允は自分で食料を調達することができず、部下数千騎を率いて党項（タングート）に亡命した。煬帝は順を立てて吐谷渾の王とし、玉門まで順を送り出して、吐谷渾の余衆を統べさせた。また、大寶王の尼洛周を補佐役に任じた。しかし、順の一行が西平にまで来たところで部下達が尼洛周を殺したので、順は帰国することができなかった。大業の末、天下が乱れたので、伏允はその隙に吐谷渾の故地を回復し、しばしば河西に侵攻した。そのため（煬帝の置いた）郡県はこれを防御する事ができなかった。

吐谷渾王の系図（在位年）

呂夸（五三五～五九一）
- 世伏（五九一～五九七）
- 伏允（五九七～～六三五）―順（六三五）

注

（1）『晋書』巻九七吐谷渾伝では「慕容廆」。

（2）『周書』巻五〇吐谷渾伝では「必要な時には富豪や商人に課税した」とある。

（3）曼頭と樹敦は、青海の南にある曼頭山と樹敦城のこと。佐藤長一九七八の第五図「吐谷渾関係略図」を参照。

（4）後藤勝一九五六：二七、佐藤長一九七八の第三章「吐谷渾における諸根拠地」（二三五頁）を参照。

（5）世伏の名は、太宗李世民を忌み、「伏」となっている。

（6）『資治通鑑』巻一七七によれば開皇十一年（五九一）のこと。

（7）『資治通鑑』巻一七八よれば開皇十七年（五九七）のこと。

（8）『資治通鑑』巻一八一によれば大業四年（六〇八）のこと。

（9）『隋書』巻二四食貨志、巻二九地理志にも見える。

党項（タングート）

党項羌は、三苗の後裔である。その種族には、宕昌、白狼があり、みな獼猴（サル）の族であると自称していた。東

は臨洮、西平に接し、西は葉護（西突厥）と対立した。その地は南北の長さ数千里で、山谷の間に暮らしていた。姓ごとに分かれて部落をなし、大きい部落は五千餘騎、小さい部落は千餘騎であった。氂牛（ヤク）の尾や羚羊（羊）の毛を織って家屋（テント）を造った。裘褐（皮衣と粗い繊維の着物）を着用し、毛織物をはおって上着にしていた。その風俗は武力を尊び、法令がなく、各々が生業をなしていたが、いったん戦争があれば、互いに集ってきた。夫役と租税がなく、お互いに往来しなかった。氂牛（ヤク）・羊・猪（ブタ）を飼育して食用とし、農業を知らなかった。その風俗は淫らで卑猥で、上も下も淫乱で、諸蛮の中では最も甚だしかった。文字がなく、ただ草木の成長を観察し歳月を記した。三年に一度集会をし、牛と羊を殺して天を祭った。人が八十歳以上で亡くなれば、立派な死に方をしたということで親戚も泣かなかった。しかし幼くして死ぬと、大枉といって親戚達が一緒に悲しんで泣いた。楽器には琵琶・横笛があり、缶を叩いて節をとった。

北魏から北周にかけて、党項はしばしば中国辺境を襲撃した。高祖（文帝楊堅）が北周の丞相であった時、中原に事変が多く、これに乗じて党項は大いに略奪を行った。蒋公の梁睿は、すでに王謙を平定すると、軍隊を還して党項を討伐したいと請願した。しかし高祖は許可しなかった。開皇四年[1]（五八四）、党項の千餘家が隋に帰化した。開皇五年（五八五）、拓跋寧叢らが各々部衆を率いて旭州（甘粛省）に至り、内附した。高祖は拓跋寧叢に大将軍の位を授け、部下達にもそれぞれ官職を授与した。開皇十六年（五九六）、党項はまた会州（甘粛省）に侵攻した。高祖は詔を下して隴西の軍隊を出動させてこれを討たせ、党項を大いに打ち破った。党項はまた、互いに部衆を率いて降服を請願し、隋の臣妾になりたいと願い、子弟を派遣して入朝させて高祖に謝罪した。高祖は彼らに向かって言った。「帰って、なんじらの父兄に語るがよい。人として生きるためには定住して、老人を養い子供を育てる必要がある。郷里に戻ったと思ったら出てまた行き、そのようなことで郷里に恥じないのか。」と。これ以降、党項の朝貢は途絶えなかった。

注

（1）『北史』党項伝は「開皇元年」になっている。

高昌（トルファン）

高昌国は、前漢の車師前王庭のことである。敦煌を去ること十三日の行程である。東西は三百里、南北は五百里で、四方には大きな山が多くある。昔、前漢の武帝が軍隊を派遣して西方を討伐した時、軍隊が疲弊して、そのうちの最も困窮したものが、高昌の地に定住したのであった。この地には漢の時代の高昌塁があり、それによって国名とした。初め、和平元年（四六〇）[1]、蠕蠕（柔然）が闞伯周を擁立して高昌王とした。太和初（四七七）、伯周が死ぬと息子の義成が立ったが、従兄の首帰に殺された。首帰は自立して高昌王になったが、また高車（テュルク）の阿伏至羅に殺された。そこで、高昌の人々は敦煌の人の張孟明を主君とした。太和二十年（四九六）[2]、孟明が国人に殺されたので、馬儒を王とし、鞏顧と麹嘉の二人を左右の長史にした。太和二十一年（四九七）、馬儒はまた北魏に遣使して帰順を請願した。北魏に帰順した人は、しかし、みな故国を恋しがって東に移動することを願わず、ともに馬儒を殺し、麹嘉を王として擁立した。麹嘉は字を霊鳳といい、金城郡榆中（甘粛省蘭州）の人であった。即位すると、また茹茹（柔然）の臣下になった。茹茹の王が高車に殺されると、また麹嘉は高車に臣従した。丁度そのとき、焉耆（カラシャール）が挹怛（エフタル）に打ち破られた。焉耆の民は自ら統治することができず、麹嘉に主君になるべき人物を派遣してほしいと請願した。麹嘉は第二子を派遣して焉耆王となした。これ以降、麹嘉は初めて強大となり、ますます国人が服従するようになった。麹嘉が死ぬと、息子の堅が即位した。

高昌の都城の周囲は千八百四十歩の大きさであった。宮殿の居室には、魯の哀公が孔子に政治について問うている場

面が描かれていた。国内には十八の城があった。官吏には、令尹が一人、その次に公が二人、次に左右の衛、次に八人の長史、その次に五人の将軍、その次に八人の司馬、次が侍郎、校郎、主簿、従事、省事がいた。大事は王が決し、小事は、王の長子と公が評議して決め、文書は使用しなかった。男性は胡服を着用し、婦人は裙襦（パンタロンと丈の短い上衣）を着け、頭上にまげ（髻）を結った。高昌の風俗や政令は中国とほとんど同じであった。

その地は石磧が多く、気候は温暖で、穀物や麦が一年のうちに二度稔り、養蚕に適し、五果（果実）を多く産出した。羊刺（刺蜜）という名の草があり、その上に蜜が生じ、味はとてもおいしい。朱のような赤塩を産し、白塩は玉のようであった。ブドウ（葡萄）酒を多く産した。この国の俗は天神に仕えると同時に仏法をも信仰した。国中の羊馬は、人に知られない辺鄙な場所で放牧し、外敵の略奪を避けた。その場所は高昌の貴族しか知らなかった。北には赤石山があり、山の北七十里の所には貪汗山（ボグド・オラ）があり、夏でも積雪があった。この山の北が鉄勒（テュルク）との境界であった（『魏書』巻一〇一高昌伝、『北史』巻九七高昌伝）。

武威の西北から近道があり、砂漠千餘里を越えると、四方は茫然とし、小道の形跡もない。行きたいと望むものは、人畜の白骨を目印にして進む。道中では、ある時には歌声や泣き声が聞こえるが、旅人がこれを頼りに進んで行くと、その多くは死ぬか行方知れずとなった。おそらく、この歌声や泣き声は、魑魅魍魎のたぐいであろう。そこで、商人達は往来する時には、その多くが伊吾（ハミ）路を利用した。

開皇十年（五九〇）、突厥が高昌の四城を打ち破ったので、高昌から二千人が中国に逃げてきて帰順した。麴堅が死ぬと、息子の伯雅が即位した。伯雅の祖母はもともと突厥可汗の娘であった。[3] 父親が死んだので、突厥はその風俗に従うように命令したが、伯雅は長いこと、突厥の命令に従わなかった。突厥が強要したので、伯雅もやむをえず、これに従った。

煬帝が帝位を継承すると、諸国を勧誘して朝貢させた。[4] 大業四年（六〇八）、高昌は遣使朝貢し、煬帝は高昌の使者を非常に丁重に待遇した。翌年、伯雅が来朝した。伯雅は高句麗遠征に従軍し、中国に帰還すると宗室の娘華容公主を娶った。[5] 大業八年（六一二）冬、伯雅は高昌国に帰り、国中に命令を下して言った。「そもそも、国を治め、人を養うのは、保全をもって貴きとし、国を安寧にし、政治をおさめるのは、万民を救う事をもって偉大となす。かつてわれわれは荒野に暮し、国境は獰猛な夷狄に連なり、人々はなんら怪しむことなく（同人無咎）、蛮族の風俗に従って被髪左衽した。いま大いなる隋帝国が統治し、天下は統一され、あまねく天とすべての地は、等しく同化に向かわないところはない。私はすでにその和やかな風に浴し、大きな感化を共有にしたいとこいねがう。庶人以上はみな、辮髪を解き、左衽をやめるべきである。[6]」煬帝は伯雅の言葉を聞くと喜び、これを非常に良い事であると考え、詔を下して言った。「徳を顕彰することは聖人や哲人の尊ぶところであり、誠を明らかにし善を遂行するのは、古典の尚書が後世の人々に教え示すところである。光禄大夫・弁国公・高昌王の伯雅は、見識と度量に遠大な経略があり、気持ちは寛容である。その忠誠心はすでに著しく、清らかな節義は遠方まで行き渡っている。伯雅はもともと中華から出て、西方の地で歳月を送ることになった。過去には多くの困難があり、獯戎（匈奴・柔然）に迫られ、しばしば窮して冠冕を壊し、髻を切って胡服を着用した。わが大隋が天下を統一すると、隋の教化は多くの夷狄たちをなびかせ、徳は四方に加わった。伯雅は砂漠を越え、険阻をものともせず、贈物を奉って朝廷にやって来た。古の制度に礼儀正しさを見、威儀の盛典を慕った。ここにおいてかれは冠冕の紐を重ね、辮髪を解き、左衽をやめて裳裾を引きずった。蛮族の風習を改め、中華の風習に従い、その仕義は前載（前の記録）より輝いた。そこで、（高昌に）衣服と冠の具を賜い、製造の規格（式）を頒布しよう。隋は使者を派遣してそれらを部領し、送り届けよう。綾絹の服を着た姿や車服のきらびやかなさまを見れば、人々は夷狄の氈毛の服を脱ぎ捨て、ふたたび中国のような礼儀正しい冠帯の国にもどるであろう。」

しかし伯雅は以前から鉄勒（テュルク）に臣従しており、鉄勒は常に重臣を派遣して高昌国に滞在させて、商胡（ソグド商人）が商売のために高昌を往来すると、これに課税し、徴集した税金を鉄勒に送っていた。従って伯雅が国民に下した命令は中国を喜ばせはしたが、高昌は結局、鉄勒を恐れて、決して風俗を改めなかった。これ以来、伯雅は毎年使者を派遣して特産物を朝貢した。

注

（1）年号は『魏書』巻一〇一高昌伝と『北史』巻九七高昌伝より補った。

（2）李錦繡・余太山二〇〇九：一〇〇は、『通典』巻一九一辺防七車師伝に「太和二年」とあるのを「二十年」の誤りと考えている。

（3）嶋崎昌一九七七b：三三〇～三三一。

（4）嶋崎昌一九七七b：三三二。

（5）麴伯雅は大業八年（六一二）三月、煬帝に従って第一次高句麗遠征に同行し（『資治通鑑』巻一八一）、同年十一月、華容公主を娶った（『隋書』巻四煬帝紀）。

（6）高昌国王の麴伯雅は息子の文泰を伴って隋に入朝し、約四年間、中国に滞在し、華容公主も降嫁された。伯雅は帰国するや、国を挙げて遊牧民族の風俗を廃止し、中華の風俗に従うようにと命令を下した（延和十二年＝六一三年）。それが「解辮削衽令」である。隋の煬帝は詔を出してまでそれを称賛する。西域諸国から徐々に北方遊牧民族を閉めだそうとする、煬帝、裴矩などの意図が読み取れる。しかし鉄勒の支配力が勝って、この改革は失敗した。トルファン文物の研究者である呉震（呉震一九八一）は、現在忘れられている高昌国の義和年号（六一四～六一九年）をトルファン出土の墓誌、文書から復元し、その間には改革に失敗した麴伯雅父子が家臣の張雄らとともに、高昌国を出奔して西突厥の

統葉護可汗のもとに亡命していたと推定する。張雄の墓誌から六一九（延和十八）年に西突厥の後ろ盾によって、麴伯雅が復位したと推定する。その後、義和の偽年号は消去され、延和年号に戻された形跡があるという。

康国（サマルカンド）

康国は康居の後裔である。かれらは絶えず移動して生活したので、一定の住地がなかった。しかし漢代以来、途絶えることなく存続した。その王は本来の姓が温であり、月氏人であった。かつては祁連山の北方の昭武城に居住したが、匈奴に撃破されたために葱嶺（パミール高原）を越えて西方に遷移し、その地で国を保持することとなった。昭武の支庶たちはそれぞれ独立して王となり、それゆえに康国（サマルカンド）周辺の諸国はみな昭武を姓とし、その出自を忘れないようにしている。[1] 康国王の字は代［世］失畢（シシュピール）であり、[2] その人柄は温厚、寛大で、よく民衆の心を掌握している。その妻は突厥の達度（タルドゥ）可汗の娘である。薩宝水（ザラフシャン河）に臨む阿禄迪城が康国の都城であり、城内は人口稠密である。三人の大臣がおり、共同して国政に携わる。その王は索髪（辮髪）にし、その上に七宝金花の冠を戴く。衣服は綾羅、錦繍の白畳を着る。王妃は髻を結い、その上を黒いスカーフで覆う。一般男子は剪髪（断髪）し、錦袍を着る。

康国は強国として有名であり、西域諸国の多くが康国に帰順する。米国（マイムルグ）、史国（キッシュ）、曹国（イスティーカーン）、何国（クシャーニーヤ）、安国（ブハラ）、小安国、那色波国（ナサフ）、烏那曷国（アンフォイ Andkhui）、穆国（アームル）がみな康国（サマルカンド）に従属している。康国には胡律（ソグド語の法典）が存在し、祆祠（ゾロアスター教寺院）に安置されており、裁判の際に取り出して判決を下す。重罪は一族を死刑に、次に重い罪は本人を死刑にする。賊盗は足切りに処す。

康国の人びとはみな彫りの深い顔立ちで（深目高鼻）、ほほ、あごのヒゲ（鬚、髯）が濃い。商業に長じており、諸外国の商人たちは交易のためにこの国に集まってくる。康国の楽器には大小の太鼓、琵琶、五弦、箜篌、笛がある。婚姻、葬制は突厥と同じである。国家の祖廟が建立されており、六月に祭礼を行う。このときは周辺諸国もみな祭礼に参加する。康国は習俗として仏教を信仰し、ソグド文字（胡書）を使用する。気候は温暖で、五穀（麦、米、粟、黍、豆）の栽培に適する。人びとは菜園で農作業に精を出し、果樹も繁茂する。家畜にはウマ、ラクダ、ラバ、ロバ、コブウシがあり、黄金、鐃沙（硇砂、塩化アンモニュウム系薬石）、甘松香、阿薩那香、瑟瑟、麝皮（大鹿の皮）、氍毹（毛織の敷物）、錦、畳を産出する。ブドウ（葡萄）酒が豊富であり、富家では千石の量を醸造する。それらは何年たっても腐敗することはない。大業年間にはじめて使者を派遣し、特産品を献上したが、その後は途絶えてしまった。(3)

注

（1）『隋書』西域伝「康国」は、それとほぼ同じ文章が『北史』西域伝「康国」に、また『北史』から転載した『魏書』西域伝「康国」にも採用されており、それぞれのテキストに若干の異同がある。「昭武」については、『新唐書』西域伝訳注（小谷・菅沼二〇一一：一四二）の康国条注6を参照。その後、吉田豊は「昭武」についての自説を『ソグド人の美術と言語』（吉田二〇一一：五三～五五「昭武の謎」）のなかで要約する。ソグド人が甘粛省祁連山の北、昭武城から匈奴によって追放され、葱嶺を越えて現在の住地に遷移したというのは、大月氏の西遷の歴史を借用した中国側の作り話で、歴史的事実ではない。吉田豊が推定するように、ソグド人が「昭武」という発音に近い名前の祖先あるいは英雄を共通に伝承することから、それを中国流に解釈したものであろう。この説の初見は『隋書』である。

（2）王名の「代失畢」は唐太宗の李世民の諱を避けて表記するもので、本来は「世失畢 Sišpyr」である。上記の『北史』『魏書』では「世夫［失］畢」と表記する。岡本孝一九八四：八〇～八三を参照。

（3）『通典』巻一一三西戎伝、康居国条には、煬帝によって西域に派遣された韋節の報告書『西蕃記』中の康国伝が引用されている。『西蕃記』は散逸して現存せず、隋代ソグド人の習俗を伝える貴重な遺文なので以下に翻訳して補足する。

韋節『西蕃記』に言う。康国人はみな商業に長けており、男子が五歳になると、読み書きを学ばせる。少し理解できるようになると、商売のやり方を習わせ、利益を得ることが最善であると教える。彼らは歌舞、音楽を好む。六月一日を一年の始まりとし、正月になると、王および庶民はみな晴着にきかえ、散髪し、髭を剃る。都城の東の林間において、七日間にわたって騎射の会を催す。最終日に的上に一枚の金貨を置き、射当てた者が一日だけ王位につくことができる。彼らの習俗は天神を信奉し、熱心に崇拝する。かれらは神の子が七月に死ぬといい、その骸骨が見つからないため、信者たちはその月になると、みな襞のある黒衣をまとい、はだしで歩き、胸を打ち、大声で泣き、涙を流して悲しみあう。男女の大人たち三百から五百人が野原に散らばって、神の子の骸骨を探しまわる。七日目にその儀式を止める（訳者注：これは古代メソポタミア起源のTammuz神の死と復活の儀礼であり、ペンジケント壁画の「哀悼図」がそれを表現するとされる）。都城の郊外にはまた別に二百戸余りの集落があり、そこに住む人びとはもっぱら葬儀を取り扱う。特別に囲いのある大きな建物（院）があり、そのなかにイヌを飼育する。死者が出るたびに、出かけて行って死体を引き取り、そして院内に運んでイヌに食べさせる。肉が食べつくされると、骨を集めて、埋葬する。棺、郭は使用しない。

安国（ブハラ）

安国は、漢の時の安息国（パルチア）である。王の姓は昭武氏で、康国王と同族である。王の字は設力登で、妻は康国の王女である。都城は那密水（ザラフシャン河）の南にあり、城壁は五重であり、周囲を流水が巡っている。宮殿は

みな平屋根である。王は黄金のラクダの玉座（金駝座）に坐り、その高さは七、八尺である。王は政務に臨むとき、つねに妻と向かい合って坐り、大臣三人が国事を評定する。風俗は康国と同じであるが、ただ姉妹や母・娘を禽獣のように互いに妻とするところが康国とは違う。煬帝が即位後、司隷従事の杜行満を西域に派遣し、杜行満は安国に至り、五色の塩を得て帰国した。安国の西百餘里の所に畢国（パイカンド）があり、およそ千餘家。畢国には君長がおらず、安国が畢国を統治する。大業五年（六〇九）、使者を派遣して朝貢したが、その後、朝貢は途絶えた。

石国（タシュケント）

石国は、薬殺水（ヤクサルテス河、現在のシル・ダリア）のそばに位置する。都城は四方十餘里である。王の姓は石、名は涅である。国城の東南に家屋を建て、その中に台座を置く。正月六日と七月十五日には、王の父母の火葬した遺骨を黄金の甕に盛り、台座の上に安置し、その周りを巡り、花や香、色々な果物をその上にまき散らす。王は臣下を率いて祭礼をとりおこなう。この儀式が終わると、王と夫人は家屋から出て別の帳（テント）に入る。臣下たちもつづいて入り、並んで座り、宴会が催され、そして祭礼は終了する。粟と麦を産出し、良馬を多く産する。この国の習俗は好戦的で、かつて西突厥に叛き、そのため射匱可汗[1]は軍隊を出動して石国を滅ぼした。特勤の匐職に石国の統治を行わせている。石国の南六百里の所に鑁汗国（フェルガナ）があり、東南六千里のところに瓜州（敦煌）がある。匐職は大業五年（六〇九）に使者を派遣して朝貢したが、その後、ふたたび朝貢しては来なかった。

注

（1）西突厥の射匱可汗（六一一～六一九）のことであるが、石国を滅亡させたのは、かれが処羅可汗（五八七～六一一）の小可汗として石国の北（千泉）に駐屯していた時、つまり西突厥特勤の匐職による大業五年（六〇九）の朝貢以前の

ことである。西突厥の小可汗制については『隋書』巻八十四西突厥伝、処羅可汗の条を参照。

女国

女国は、葱嶺（パミール）の南にあり、代々女性が王となる。王の姓は蘇毗（スンパ）、字は末羽で、王位にあること二十年である。女王の夫は、金聚（スヴァルナゴトラ）と号し、政治には関与しない。国内の成年男子は、ただ戦争に従事することだけを務めとする。山上に城を築き、四方は五～六里であり、戸数が一万ある。国王は九層の楼閣に住み、侍女数百人が仕え、五日に一度政務を執り行う。また小女王がおり、共同で国政を担当する。

その俗は婦人を尊び、男性を軽んずるが、性格は嫉妬深くない。男女はみな顔に色を塗り、一日のうち数回、塗りかえた。人はみな被髪し（ざんばら髪）、皮革で靴をつくり、課税は定まっていない。気候は全般に寒く、弓矢による狩猟を生業とする。真鑰（鑰石）、朱沙（朱）、麝香、犛牛（ヤク）、駿馬、蜀馬を産する。とりわけ塩の産出が多く、常に塩を天竺に運んで販売し、数倍の利益を得る。また、しばしば天竺・党項と戦争をする。女王が亡くなると、国中から金銭をたくさん集め、その金銭で亡くなった女王の一族の中から賢女二人を求め、一人を女王となし、もう一人を小女王とする。貴人が死ぬと、その皮膚を剥いで、金の屑（金粉）を遺体の骨や肉と混ぜ合わせて瓶の中に置き、それを埋葬する。一年たつと、また皮を鉄器に入れて埋葬する。この国の俗は阿修羅神（アシュラ）に仕え、樹神を祭る。正月にはヒトあるいはサルを犠牲にして祭祀をおこなう。祭りが終わると、山に入って祈る。すると雌雉のような鳥がやってきて手のひらにのる。その腹を破り、腹の中を調べ見て、粟があれば、この年は豊作であるが、砂石ならば、この年は災厄があると言う。それを鳥占いという。開皇六年（五八六）に使者を派遣して朝貢したが、その後は途絶えた。（『新唐書』西域伝、「東女国」とその訳注〔小谷・菅沼二〇一〇：九二～九四〕を参照）

焉耆（カラシャール）

焉耆国は、白山（天山山脈）の南七十里のところに都城を置き、漢代以来の旧国である。国王の姓は龍、字は突騎という。都城は二里四方で、国内には九つの城があり、勝兵千餘人を擁する。その国には大綱（法律）がない。その国の俗は仏典を奉り、婆羅門（インド人）に似る。婚姻の礼は中国と同じ。死者は火葬に付し、服喪の期間は七日間である。男性は髪を切る（剪髪）。魚、塩、蒲（がま）、葦（あし）を売って利益を得る。東は高昌（トルファン）から九百里、西は亀茲（クチャ）から九百里の距離にある。周囲はみな砂漠である。東南は瓜州（敦煌）から二千二百里の距離に位置する。大業年間中に使者を派遣して特産物を献上した。

亀茲（クチャ）

亀茲国は白山（天山山脈）の南、百七十里のところに都城を置き、漢代以来の旧国である。国王の姓は白、字は蘇尼咥[1]という。都城は六里四方で、勝兵数千人を擁する。風習として殺人を犯した者は死刑、強盗は片腕、片足を斬る。習俗は焉耆（カラシャール）と同じ。国王は頭に綵帯を巻き、それを後ろに垂らし、黄金の師子座に坐る。土地には稲、粟、菽（マメ）、麦、饒銅、鉄、鉛、麝皮（大鹿の皮）、氈毯（毛織の敷物）、饒沙、塩緑（石緑、天然の眼病薬）、雌黄（顔料、丹薬）、胡粉、安息香、良馬、封牛（コブウシ）を多く産する。東は焉耆から九百里、南は于闐（ホータン）から千四百里、西は疏勒（カシュガル）から千五百里、西北は西突厥の王庭（牙）から六百餘里、東南は瓜州（敦煌）から三千一百里の距離に位置する。大業中に使者を派遣して特産物を献上した。

注

（1）当時のクチャ国王蘇尼咥の本名はブラーフミー文字の Toṭṭika であろう。それはキジル千仏洞第六六～六七窟から出土したブラーフミー写本中（Lüders 1930：27）やキジル千仏洞第二〇五窟のクチャ王夫妻像に付されたブラーフミー文字の題辞で確認される。またその王妃の名が Svayamprabhā であることも判明した。（A. von Le Coq & E. Waldschmidt 1933：28-29）

疏勒（カシュガル）

疏勒国は、白山（天山山脈）の南百餘里のところに都城を置き、漢代以来の旧国である。その王の字は阿彌厥で、手足の指はみな六本ある。子供が生まれ、指が六本ないと育てない。都城は五里四方であり、国内には大きな城が十二、小さな城が数十あり、勝兵二千人を擁する。王は黄金の師子冠をかぶる。その土地は稲、粟、麻、麦、銅、鉄、錦、雌黄（顔料、丹薬）を多く産出し、毎年、常にそれらを突厥に献上する。南には黄河があり、西は葱嶺（パミール）に沿い、東は亀茲（クチャ）から千五百里、西は鏺汗（フェルガナ）から千里、南は朱倶波（カルガリク）から八～九百里、東北は西突厥の王庭（牙）から千餘里、東南は瓜州（敦煌）から四千六百里の距離に位置する。大業年間中に使者を派遣して特産物を献上した。

于闐（ホータン）

于闐国は、葱嶺（パミール）の北二百餘里のところに都城を置く。王の姓は王で、字は卑示閉練であった。都城は八～九里四方であり、国には大きな城が五つ、小さな城が数十あり、勝兵数千人を擁する。その国の風俗は仏法を尊び、

僧尼が最も多く、王は常に斎戒を行う。城の南五十里のところに贊摩寺があり、羅漢比丘の比盧旃が建造したと言われる。石の上には、辟支佛（独覚）の仏足跡がある。于闐の西五百里のところに比摩寺があり、老子がここでブッダを教化したと伝える（老子化胡成佛之所）[1]。この国の風俗は礼儀がなく、大勢の盗賊がはびこっている。王は錦の帽子と黄金の鼠冠をかぶり、王の妻は金花を頭に戴いている。王の頭髪は人には見せない。于闐の慣例として、もし王の頭髪が人に見られたら、その年は穀物が実らないと言われる。土地には麻、麦、粟、稲、五果（種々の果実）が多く産出される。園林が多く、山からは美しい玉がたくさん取れる。東は鄯善（ローラン）から千五百里、南は女国から三千里、西は朱倶波（カルガリク）から千里、北は亀茲（クチャ）から千四百里、東北は瓜州から二千八百里の距離に位置する。大業年間中に、しばしば使者を派遣して朝貢した。

注

（1）桑原隲蔵一九六八：二五五～二六四参照。贊摩寺と比盧旃については『周書』于闐国条の注1を参照。

鐵汗（フェルガナ）

鐵汗国は、葱嶺（パミール）の西五百餘里のところに都城を置く。昔の渠捜国である。王の姓は昭武、字は阿利柒である。都城は四里四方であり、勝兵数千人を擁する。王は金羊牀に坐り、その妻は頭に金花飾りを戴く。その地は朱沙（朱）、金、鉄が豊富である。東は疏勒から千里、西は蘇対沙那国（ストゥルーシャナ）から五百里、西北は石国（タシュケント）から五百里、東北は西突厥可汗の王庭（牙）から二千餘里、東は瓜州（敦煌）から五千五百里の距離に位置する。大業年間中に使者を派遣して特産物を献上した。

吐火羅（トカラ）

吐火羅国は、葱嶺（パミール）の西五百里のところに都城を置き、挹怛（エフタル）と雑居する。都城は二里四方であり、勝兵は十万人で、みな戦闘に習熟している。その俗は仏教を信奉する。兄弟で一人の妻を共有し、代わる代わる寝所を共にする。一人が寝所に入るたびに、扉の外に自分の上衣をかけ、しるしとする。子がうまれると長兄の子になる。その山の穴の中に神馬がおり、毎年、雌馬をその穴の所に放牧しておくと、必ず名馬を産んだ。南は漕国（カピーシー）から千七百里、東は瓜州（敦煌）から五千八百里の距離に位置する。大業年間中に使者を派遣して朝貢した。

挹怛（エフタル）

挹怛国は烏滸水（オクサス河）の南二百餘里のところに都城を置く。大月氏の種族である。勝兵五～六千人を擁する。この国は習俗として戦闘が得意である。以前、国が滅亡に追い込まれた時、突厥は通設（吐屯）の字詰を派遣して、その国（挹怛）を強奪した[1]。都城は十餘里四方で、寺塔が多く、みな黄金で飾られている。兄弟は妻を共有する[2]。婦人で夫が一人のばあいは、一本角の帽子をかぶる。夫の兄弟が大勢いるものは、その人数の分だけ帽子に角をつける。南は漕国から千五百里、東は瓜州（敦煌）から六千五百里の距離に位置する。大業年間中、使者を派遣して特産物を献上した。

注

（1）エフタルの滅亡は西方史料から西暦五六二～五六七年間のことと考えられ、『隋書』のこの記事は、『周書』噠噠伝に「明帝二年（五五八）、竝遣使来献。後為突厥所破、部落分散、職貢遂絶」とあるのと同じで、ともにエフタルの滅亡についての中国側の記録であろう。

（2）吐火羅国と挹怛国に記述される一妻多夫（polyandry）の風習は、慧超『往五天竺国伝』安国条よると、「其吐火羅、乃至闍賓国、犯引国、謝風国等、兄弟十人、五人、三人、両人、共娶一妻、不許各娶一婦、恐破家計」とあり、アフガニスタン、特にヒンドゥクシュ山脈の北側に住む人びとにとって広く一般的な風習であったことがわかる。慧超伝はそれが主として経済的な理由であると解釈する。最近、この地域からバクトリア文字、言語の皮革文書が多数出土し、そのひとつに兄弟二人が一人の妻を娶るという内容の結婚契約文書が解読された（Sims-Williams 2000：32-35）。それは一一〇年のバクトリア紀年（西暦三四二年）をもち、上述の史料を裏付けるものとなった。一妻多夫はエフタルに特徴的な風習とされ、それはエフタルがこの地に進出し、土地の風習に染まったためと考えられてきたが、むしろエフタル人がアフガニスタン北部、ことにバダフシャン山中に拠点を持つ遊牧民の出自であったからだと考えたほうがよい（小谷一九六六：四〇〇〜四〇二）。

米国（マイムルグ）

米国は那密水（ザラフシャン河）の西に都城を置く。そこはかつての康居の地である。国王は存在しない。城主の姓は昭武で、康国（サマルカンド）の王の庶子で、字を閉拙という。都城は二里四方である。勝兵数百人を擁する。西北は康国から百里、東は蘇対沙那国から五百里、西南は史国（キッシュ）から二百里、東は瓜州（敦煌）から六千四百里の距離に位置する。大業年間中にしばしば特産物を献上した。

史国（キッシュ）

史国は、独莫水（カシュカ・ダリア）の南十里のところに都城を置く。かつての康居の地である。王の姓は昭武、字

は遮で、同様に康国王の庶子である。都城は二里四方であり、勝兵数千人を擁する。習俗は康国と同じ。北は康国から二百四十里、南は吐火羅から五百里、西は那色波国（ナサフ）から二百里、東北は米国から二百里、東は瓜州（敦煌）から六千五百里の距離に位置する。大業年間中、使者を派遣して特産物を献上した。

曹国（イスティーカーン）

曹国は那密水（ザラフシャン河）の南数里のところに都城を置く。かつての康居の地である。王は存在せず、康国王が息子の烏建に統治させている。都城は三里四方であり、勝兵千餘人を擁する。この国には得悉神が祀られており、西海より以東の諸国はみなこの神を崇拝する。(1) この神には金人と金製の破羅（鉢）がある。鉢の大きさは幅、高さともに五尺で、上下にバランスがとれた形である。(2) 毎日、ラクダ五頭、ウマ十頭、ヒツジ百頭を犠牲にして神を祭る。常に千人がこれを食べても尽きない。東南は康国（サマルカンド）から百里、西は何国（クシャーニーヤ）から百五十里、東は瓜州（敦煌）から六千六百里の距離に位置する。大業年間中に使者を派遣して特産物を献上した。

注

（1）ソグド人の神「得悉」をTakhsīch（タクシチュ）神と最初に正しく判読したのはW. B. Henning 1965である。Henningはソグド語「古代書簡」に、Nanaivandak（ナナ女神の僕）、Takhsīchvandak（タクシチュ神の僕）というソグドの人名があることから、「得悉（Takhsīch）神」をナナ女神と関係深いソグドの神と考えたが、その神格については不明とした。タクシチュ・ヴァンダク Takhsīchvandak の名前は、その後インダス河上流のギルギット渓谷の岩石刻文にも数例見つかっており、また焉耆七個星郷出土の銀器のひとつに「（この鉢は）タクシチュ神に属する」というソグド語の刻文が判読された（林梅村一九九八：一六〇～一六三）。『隋書』曹国条には「得悉神」の記述に続いて、その祠には「金

人」像および大きな「金破羅」があると記す。金製神像がタクシチュ神の像であるか、本尊としてのナナ女神像かわからない。タクシチュ神の神格と図像の探求についてB. Marshak & F. Grenet (1998) が詳しい。『隋書』曹国の記事は韋節、杜行満らの見聞録『西蕃記』（六〇五～六〇六年頃）に基づくと思われるが、その百年後、イスラーム・アラブの将軍アミール・クタイバがサマルカンドを攻撃した時、その遠征途上ザラフシャン河沿いの集落で宿営した（七一〇年）。そこに拝火寺院（bayt al-nār）と神々の家（bayt āliha）が存在したと記す。サマルカンド征服後、それらの偶像は放り出され、装身具は剥奪され、ついで燃やされた。偶像の一つには、それを汚す者はだれであれ生命を落とすと言い伝えられたものがあったが、クタイバは人びとの制止をふりきって、自らの手でそれに火をつけたという（小谷仲男一九九七：五三～五四）。その偶像がイシュティーカーン（西曹）に祀られていた「得悉神」であった可能性がある。

（2）金破羅は金製の破羅（padrōd 鉢）であり、ナナ女神あるいは得悉神の祠堂に供えられた大きな酒器のことであろう（蔡鴻生一九九八：一一～一四参照）。

何国（クシャーニーヤ）

何国は、那密水（ザラフシャン河）の南数里のところに都城を置く。かつての康居の地である。王の姓は昭武で、同様に康国王の一族であり、字は敦である。都城は二里四方である。勝兵千人を擁する。王は金羊座に坐る。東は曹国から百五十里、西は小安国から三百里、東は瓜州（敦煌）から六千七百五十里の距離に位置する。大業年間中、使者を派遣して特産物を献上した。

烏那曷（アンフォイ）

烏那曷国は烏滸水（オクサス河）の西に都城を置く。かつての安息国（パルチア）の地である。王の姓は昭武で、同様に康国の一族で、字は仏食である。都城は二里四方である。勝兵数百人を擁する。王は金羊座に坐る。東北は安国（ブハラ）から四百里、西北は穆国（アームル）から二百餘里、東は瓜州（敦煌）から七千五百里の距離に位置する。大業年間中に使者を派遣して特産物を献上した。

穆国（アームル）

穆国は烏滸水（オクサス河）の西に都城を置く。同様に安息国（パルチア）の故地であり、烏那曷の隣国である。王の姓は昭武で、同様に康国の一族で、字は阿濫密である。都城は三里四方である。勝兵二千人を擁する。東北は安国（ブハラ）から五百里、東は烏那曷から二百餘里、西は波斯（ペルシア）から四千餘里、東は瓜州（敦煌）から七千七百里の距離に位置する。大業年間中に使者を派遣して特産物を献上した。

波斯（ペルシア）

波斯国（ササン朝ペルシア）は達曷水（ティグリス河）西側の蘇蘭城（セレウキア）に都城を置く。すなわち（漢代）條支国の故地（メソポタミア南部）である。王の名字は庫薩和（ホスロー二世）である。都城は十餘里四方、二万餘人の勝兵を擁し、象に乗って戦う。この国には死刑はなく、刑罰としては手足の切断や家財の没収、あるいは鬚を剃り、あるいは首に木牌（罪を記した首枷）をかけて罪人であることの標識とする。人が三歳以上になれば、人頭税（口銭）四文を出させる。この国では姉妹を妻とする。人が亡くなると、遺体を山に捨て、一ヵ月間喪に服す。王は金花冠をかぶり、黄金製の師子座に坐り、髪の上に金片をつけて飾りとした。錦袍を着用し、その上から瓔珞をつけて飾る

（『周書』異域伝）。この国は良馬、ラバ（大驢）、ライオン（師子）、白象、ダチョウの卵、真珠、頗黎（ガラス）、獣魄（琥珀）、珊瑚、瑠璃、瑪瑙、水精（水晶）、瑟瑟、呼洛羯、呂騰、火斉（ルビー）、金剛（ダイヤモンド）、金、銀、鍮石（真鍮）、銅、鑌鉄（はがね）、錫、錦（綿？）、畳、細布（糸の細い布）、氈毯（毛織の敷物）、駱駝（毛織の敷物）、護那、越諾布（綿布）、檀、金縷織成、赤麝皮（赤色の大鹿の皮）、朱沙（朱）、水銀、薫陸香、鬱金（サフラン）、蘇合香（樹脂）、青木香（樹脂）などの香料、胡椒、畢撥、石蜜、半蜜、千年棗（ナツメヤシ）、附子（トリカブト）、訶黎勒（かりろく）、無食子（ドングリ）、塩緑（石緑、天然の眼病薬）、雌黄（顔料、丹薬）を多く産出する（『魏書』西域伝）[1]。西突厥は波斯（ササン朝ペルシア）を征服することができず、これを間接的に支配（羈縻）するのみである。波斯（ササン朝ペルシア）は中国に使者を派遣するごとに貢物を献上する。西は海（インド洋）から数百里、東は穆国（アームル）から四千餘里、西北は拂菻（ビザンツ）から四千五百里、東は瓜州（敦煌）から一万千七百里の距離にある。煬帝は雲騎尉の李昱を派遣して波斯と通好し、波斯の使者は李昱に従って隋に特産物を献上した。

注

（1）波斯国産物名の羅列は、ほぼ同じ内容が『魏書』西域伝、波斯国条にあり、それが『周書』異域伝、『隋書』西域伝、『通典』西戎伝にも継承される。内田吟風は散佚した『魏書』西域伝の原文を『北史』西域伝から復元するにあたって、それらが『魏書』本来の原文であるか、『周書』、『隋書』の原文であるのか判断に迷った（内田一九七一：九七）。しかしその後の『中国正史西域伝の訳注』（内田一九八〇：一七）では、『魏書』西域伝の原文として採用した。結果的にはそれが正しい判断だったと思われる。産物名の最初に挙げられる良馬、大驢、師子、白象、大鳥については、『魏書（北史）』は産物名羅列と別の文章のなかで記述しており、そのほうが自然である。また『魏書（北史）』と比較すると、『隋書』は騊（ラクダ）、『周書』では大驢（ラバ）と騊、『通典』は大驢を脱落している。白象はインドのものであって、ペ

ルシアにはふさわしくない。内田吟風が指摘するように（内田一九七一：九八）、『洛陽伽藍記』巻三に「永橋南道東有白象、獅子二坊。白象者、永平二年、乾（陀）羅国胡王所献。……獅子者、波斯国胡王所献也。為逆賊万俟醜奴所獲、留於寇中。永安末、醜奴破滅、始達京師」とあり、白象はガンダーラ国から献上され、獅子（ライオン）はペルシア国から献上されたものであった。そのようなことから白象はペルシア（波斯国）の特産に混同されたのであろう。なお波斯国の特産品の内容については内田一九八〇：一八～一九に詳しく注記されているので参照されたい。

漕国（カーピシー）

漕国は葱嶺の北にある。漢の時の罽賓国である。王の姓は昭武で、字は順達であり、康国王の宗族である。[1] 都城は四里四方である。一万人餘の勝兵を擁する。国法は厳格で、殺人と強盗はみな死刑となる。その国は淫祠を祭る。葱嶺山に順天神というものがあり、儀式は非常に華美である。[2] 祠堂は金銀の延べ板で屋根を葺き、銀で床を造り、参拝者は一日に千餘人ある。祠堂の前には一匹の魚の背骨があり、そのトンネルを通って騎兵が出入りする。国王は金魚頭冠をかぶり、金馬座に坐る。この地は、稲、粟、豆、麦、饒象、馬、封牛（コブウシ）、金、銀、鑌鉄（はがね）、氈毳（毛織の敷物）、朱沙（朱）、青黛、安息香（樹脂）、青木香などの香料、石蜜、半蜜、黒塩、阿魏、没薬、白附子を多く産出する。北は帆延（バーミヤーン）から七百里、東は劫国から六百里、東北は瓜州（敦煌）から六千六百里の距離にある。大業年間に使者を派遣して特産物を献上した。

注

（1）「在葱嶺之北」、「康国王之宗族」とするのは、ソグド諸国の曹国（イスティーカーン）と混同したためとおもわれる。

（2）漕国の順天神というのは『大唐西域記』巻一、迦畢試国条に「薬那（スーナ）天神」とあるものと同じ。同書巻十に

よれば、この天神は漕矩吒国（ザブリスタン、現在のガズニ）に祀られている神であり、『隋書』がカーピシー国（現在のカーブル近辺）を漕国と表現したのは、それによる混同の結果とおもわれる。桑山正進一九九〇：一六三～一七七参照。

附国（プー、ピャーユル）

附国は、蜀郡（四川省）の西北二千餘里の所にある。漢の時代の西南夷である。[1] その東部に嘉良夷（ロロ、カロ族）がおり、そこに居住する種族は自ら酋長にひきいられ、附国に従属する。その風俗は附国と同じであるが、言語は少しずつ異なり、お互いに統一しようとしない。人びとには姓がない。附国の王は、名字を宜縛といい、その国の大きさは、南北八百里、東南千五百里である。王都には城柵がなく、川谷の近くにあり、山険に依拠する。国の習俗としては復讐を好む。それゆえ家屋は石を積み重ねて造り、復讐の危険から身を守る。家屋の高いものは十餘丈、低いものは五～六丈の高さがあり、階と階との間隔は一丈あまり、木材で階を仕切る。家屋の基礎は三～四歩四方、最上階になると二～三歩四方の広さになる。その形状は仏教の層塔に似る。一階に小さな門口を開き、内側から上の階にのぼる。夜は必ず門にかんぬきをかけ、盗賊の侵入を防ぐ。附国には二万餘の戸数があり、指示、号令は王から出る。嘉良夷の政令は、酋長が取り次ぐ。罪の重いものは死刑、罪の軽いものは牛で罪の償いをする。

この国の人びとは敏捷で、剣術に習熟する。漆の皮で兜や鎧を造り、弓の長さは六尺、弦は竹で造る。大勢の母親や兄嫁を妻にする。子や弟が亡くなると、父親と兄がその未亡人を自分の妻とする。歌舞を好み、笙を吹きならし、長笛を吹く。人が死亡すると、喪服の制度はなく、遺骸を高いベッドの上に安置し、死者の衣服を洗い清め、兜と鎧を遺骸にかぶせ、獣皮で遺骸を覆う。故人の子と孫は哭泣せず、甲冑を着用して剣舞しながら、「わが父は鬼に取られた。わ

れわれは鬼を殺して怨みをはらしたい」と叫ぶ。その他の親戚は三度哭泣し、そして止める。婦人は哭泣する時、必ず両手で顔をおおう。死者を出した家は牛を殺し、親族は猪と酒を贈り、ともに飲食して遺骸を埋葬する。死後十年に大葬を行う。大葬には必ず親戚や賓客が集い、犠牲に使用する馬は数匹ないし十匹におよぶ。祖父の位牌を立てて礼拝する。その国の風俗は皮で帽子を作り、形は丸く鉢のようである。あるものは冪羅（べきら）をかぶる。衣服は主として毛織物や皮衣を着用する。牛の脚皮をそっくり剥ぎ取って靴を作る。首には鉄の鎖を懸け、手には鉄輪を通す。王と酋長たちは金製の首飾りをつけ、胸の前には直径三寸の黄金の花を懸ける。附国の土地は高地であり、気候は涼しく、風が強く、雨は少ない。小麦と青粱（ハダカムギ）がよく育つ。山から金・銀が産出される。白雉が多く生息し、川には嘉魚がおり、その長さは四尺、細かな鱗がある。

大業四年（六〇八）、附国の王は素福ら八人を使者として派遣して入朝させた。翌年には、王はまた弟の息子である宜林に嘉良夷の民六十人を率いさせて朝貢させた。附国は、良馬を献上しようとするが、道が険阻で通れないため、山道を開拓して朝貢したいと朝廷に請願した。しかし、煬帝は、開拓のための工事が人民を疲弊させると言って、許さなかった。

嘉良夷には河（鴉嚨江？）があり、その広さは六十～七十丈である。附国にも河（金沙江？）があり、広さは百餘丈である。ともに南に流れ、皮袋の舟で渡河する。

附国の南には薄縁夷があり、風俗は附国と同じである。西には女国（西チベット）があり、その東北には山が数千里、長く連なっていて、党項（タングート）に接している。その間に羌族が散在する。大左封、小左封、昔衛、葛延、白狗、向人、望族、林臺、春桑、利豆、迷桑、婢薬、大硤、白蘭、叱利摸徒、那鄂、當迷、渠歩、桑悟、千碉という国があり、それらはみな深い山や険しい谷にあり、大君長はいない。その風俗は党項とほとんど同じで、吐谷渾、または附国に従

屬している。

これらの国々は大業年間に朝貢にきた。そこで、西南の辺境地帯に諸道総管を設置し、これらの国々を遠方より管轄した（『北史』巻九十六と『通典』巻一八七辺防三に、ほぼ同様の附国伝がある）。

注

（1）附国については、チベット人が自らの国を「プー Bod」と呼んでいたことから、附国をそれに当て、吐蕃の前身とする考え方がある。確かに隋代の記録には吐蕃の名は見えず、附国のみがあり、唐代の記録には附国の名が消え、吐蕃が登場する。日本では佐藤長がその意見に賛成し（佐藤長一九七八：一七七、三八七～三九六）、山口瑞鳳は本来附国がチベット東部のカム地方を呼ぶ名称であったとして賛成しない（山口瑞鳳一九八三：二〇〇～二二五）。山口は附国の位置をそのように考えて、本文中の附国を流れる河を金沙江（揚子江の上流）とし、また嘉良夷を流れる河を鴉嚨江に比定する。佐藤は附国を吐蕃前身とする立場から、その南に位置するという薄縁夷をブータンに比定する。

史臣（編者）が論評する。いにしえより遠方の夷狄の地を開拓して絶域に通じるには、必ず雄略の皇帝が世に出て、それに刺激されて好奇心の強い臣下が輩出したことによる。最初に張騫が西域への道筋を開き（鑿空）、そのあと班超が筆を投げ捨てて西域に赴いた。ある人は多くの宝物で夷狄を誘ってこれと結び、ある人は剣でもって夷狄を征服しようとした。万死（死ぬ可能性が甚だ多い事）の地に身を投じて一攫千金の功を求めた。みな、主君が遠来の客が多いことを喜び、臣下が軽生（生命を軽んじる）の節に殉じたことによる。これは、皇帝が好むことを下が知って過度に行うものである。煬帝は領土拡張の野心があり、秦・漢をおおい凌ごうとした。ちょうどそのとき裴矩が『西域図記』を進呈して煬帝の心を揺り動かしたので、煬帝は自ら玉門関の外に出征し、伊吾（ハミ）、且末（チェルチェン）に郡を設

置し、その結果、玉門関の右（西方）の流砂の地域に及ぶまで戦争で不安が広がった。もし北狄の脅威がなく、東夷に勝利を収めたならば、きっと輪臺に守備兵を設け、烏塁の城塞を築き、大秦（ローマ）の明珠を求め、條支（ペルシア湾）から駝鳥の卵をもたらし、東西を往来して物資を輸送しようとしたであろう。いったいどうやって、その疲弊に耐えられようか。いにしえの哲王（賢明な王）の統治方法は、四方五千里が中国王朝の安寧につとめるべき地であり、それより外側の要服・荒服の地域には干渉しなかった。どうして皇帝の威徳が加えられないことがあろうか。それはおそらく四方の夷狄にかかわって中国を疲労させないためであり、つまり無用をもって有用を害しないためであった。ところが秦は五嶺に駐屯し、漢は三つの辺境に干渉したため、ある時は行路で飢え死にするものが大勢おり、ある時は戸口が半減した。隋王室は強盛を恃んで、またもや青海で吐谷渾に翻弄されて狼狽した。これもみな一人（煬帝）が道を失ったために、億兆の民がその毒に苦しむことになったのである。もしも即叙（秩序正しさ）の意味をよく考え、西域諸国による都護の設置の請願を固辞し、千里を走る馬を返上し、白狼（徳のある王者に現れる瑞祥）の貢物を求めなければ、西方の七戎と東方の九夷は中国の徳風を慕い、いくつもの通訳を介して中国にやって来るだろう。仮に遼東（高句麗遠征）の敗戦があったとしても、どうして江都の災いに及ぼうか。

『周書』巻五十異域伝（下）

『周書』異域伝（下）訳注細目

1　突厥（テュルク）［省略］
2　吐谷渾（とよくこん）
3　高昌（トルファン）
4　鄯善（ローラン）
5　焉耆（カラシャール）
6　亀茲（クチャ）
7　于闐（ホータン）
8　嚈噠（エフタル）
9　粟特（ソグド）
10　安息（プハラ）
11　波斯（ペルシア）
異域伝（下）跋、付異域伝（上）序

吐谷渾（とよくこん）

吐谷渾は、もともとは遼東の鮮卑、慕容廆の庶兄であった。初め吐谷渾の馬と慕容廆の馬が戦い、慕容廆の馬が傷ついた。慕容廆は人を派遣して吐谷渾を詰問した。すると吐谷渾は怒り、自分の部落を率いて遼東を去り、枹罕で停止し、自ら君長になった。孫の葉延の時になって書伝[1]を良く調べ、いにしえでは王の父親の字を氏となしたことを知り、ついに吐谷渾の名前を氏とした。

吐谷渾から伏連籌に至るまで十四世代であった。伏連籌が亡くなると、息子の夸呂[2]が即位し、初めて自ら可汗と号した。治所は伏俟城で、青海の西十五里の場所にあった。城郭はあったが、これには住まず、常にテントで生活し、水や

草を追い求めて牧畜を行った。その地は東西が三千里、南北が千餘里であった。官職には、王公、僕射、尚書、郎中、将軍の号があった。夸呂は髪を後ろにたれ、ひと束ねにしたまげを結い、毛飾りと珠を髪に飾り、黒絹の帽子をかぶり、金の師子座に坐っていた。彼の妻は恪尊と号し、織り成した裙襦（パンタロンと丈の短い上着）を着用し、大きな錦の袍を着て、辮髪を後ろにたらし、頭に金の花を飾っていた。

吐谷渾の男性の衣服は中国とほぼ同じで、多くは冪羅（べきら）を冠にしていた。また、絹の帽子をかぶっていた。女性はみな連珠の紐で髪を束ね、その珠が多いものほど身分が高かった。武器には弓・刀・鎧・矛があった。その国には常税[3]がなく、必要があれば富豪や商人に課税して賄っていた。刑罰は、人を殺したものと馬を盗んだものは死刑、それ以外の罪を犯したものに対しては物で贖罪させ、罪の程度を考えて杖刑に処した。人に死刑を下す時には必ず絨毯で頭をすっぽりつつみ、高い所から石を投げて罪人を撃ち殺した。父親や兄が亡くなると、父の後妻や兄嫁達を妻としたが、それは突厥の風俗と同じであった。婚姻の方法は、貧しくて財物を蓄えられないものは、女性を盗んで逃げた。死者はまたみな遺体を埋葬する。葬儀が終わると服喪の期間も終わった。その国の人々の性格は欲深く、平気で人を殺害した。弓矢で狩猟することを好み、肉や乳製品を食糧とした。また農耕も行った。その国の北の境界は気候が寒い時が多く、ただ、かぶらと大麦だけが取れた。そのため、吐谷渾では貧しいものが多く、豊かなものは少なかった。青海の周囲は千餘里で、湖の中に小さな山があった。毎年の冬、湖が凍った後、雌の良馬をこの小山の上に置き、翌年の冬にこの雌馬を収めると、馬はみな子を孕んでおり、子を産むので駒を得ることができる。この駒を龍種と号した。龍種は、その多くが駿馬であり、世間では「青海驄」として知られている。その地は犛牛（ヤク）を産し、鳥は鸊鵜が多かった。

大統年間（五三五～五五一）中に、夸呂はふたたび遣使し、馬・羊・牛などを献上した。しかし侵攻と略奪はなお止まず、辺境地帯の多くが吐谷渾の攻撃によって被害を受けた。西魏の廃帝二年（五五三）、太祖（西魏の丞相宇文泰）

は大軍を率いて姑蔵（武威）に至った。夸呂は震撼し、西魏に使者を派遣して特産物を献上した。この年、夸呂はまた遣使して斉氏（北斉）にも通好した。西魏の涼州刺史の史寧は、吐谷渾の使者の帰還を伺い知ると、軽装騎兵を従えて涼州の西の赤泉で使者を襲撃し、僕射の乞伏觸扳、将軍の翟潘密、商胡（ソグド商人）二百四十人、駄馬とラバを六百頭、もろもろのあやぎぬや絹糸を数万獲得した。西魏の恭帝二年（五五五）、史寧はまた突厥の木汗可汗[4]とともに夸呂を襲撃し、これを破って妻子を捕虜にし、珍しい宝物や諸々の畜獣をたくさん獲得した。その事については、史寧伝（『周書』巻二八）に詳しく記す。武成年間（五五九～五六〇）の初め、夸呂はまた涼州に入寇し、刺史の是云寶は戦死した。そこで、賀蘭祥、宇文貴に詔して軍勢を率いてこれを討たせた。夸呂は広定王と鐘留王を派遣してこれを拒み戦ったが、賀蘭祥らは吐谷渾の軍勢を打ち破り、広定王らは逃走した。賀蘭祥はまた、吐谷渾の洮陽、洪和の二つの城を攻め落とし、洮州を設置して帰還した。保定年間（五六一～五六五）中に夸呂は、前後三回、遣使して特産物を献上した。天和年間（五六六～五七二）の初め、吐谷渾の龍涸王莫昌が民を率いて降服したので、その地を扶州となした。天和二年（五六七）五月、吐谷渾はまた使者を派遣して来献した。

建徳五年（五七六）、吐谷渾は大いに乱れた。高祖（武帝宇文邕）は皇太子に詔して吐谷渾を征伐させ、北周の軍隊は青海を渡って伏俟城に到達した。夸呂は逃亡し、皇太子は残った民を捕虜にして帰還した。翌年、夸呂はまた遣使して献上品を奉った。宣政年間（五七八）の初め、その趙王の他婁屯がやって来て降服した。これ以後、朝貢はついに途絶えた。

注

（1）『晋書』巻九七吐谷渾伝、『宋書』巻九六吐谷渾伝によれば、『礼記』に「公孫之子得以王父字為氏」とあるので、吐谷渾の名を氏にしたとある。

（2）『周書』吐谷渾伝では伏連籌が死んだ後、子の夸呂がただちに即位したと読めるが、『梁書』の河南伝と武帝本紀下では、伏連籌の死後、その子の呵羅真（五二九）、ついで仏輔（五三〇～四）、可沓振（五三四～?）が王位を継いだとする。一方、夸呂は興和二年（五四〇）に東魏に朝貢しているので（『北史』吐谷渾伝）、その即位は五三四年以降、五四〇年以前となる。このような南・北朝史料の相違は、北魏の分裂期（五三四～五年）に当たり、北朝と吐谷渾の交流が途切れたためであり、南朝の記録の方に信憑性がある。なお、『隋書』では夸呂を呂夸と記す。

（3）吐谷渾の常税については松田寿男一九八七a：九五を参照。

（4）木汗可汗（『隋書』は木杆可汗と表記）は同じ五五五年、エフタル遠征も行っている。

吐谷渾王の系図

①吐谷渾（?～三一七）――……――⑭伏連籌（四九〇～五二九）――⑱夸呂（五三五～五九一）

高昌（トルファン）

高昌は、車師前王の故地である。東は長安から四千九百里の距離にあり、漢の西域長史と戊己校尉が共に、この地に治所をおいていた。晋はこの地を高昌郡とした。張軌、呂光、沮渠蒙遜は河西に拠点を置き、みなここに太守を置いて高昌を統治した。その後、闞爽と沮渠無諱が、自称して太守となった。沮渠無諱が死ぬと、茹茹（柔然）が無諱の弟安周を殺し、闞伯周を高昌王につけた。高昌において支配者が国王と称するのは、これより始まった。闞伯周の甥の首帰は、高車に滅亡させられた。次に張孟明、馬儒が相次いで国王になったが、二人とも国人たちが殺害した。そこで国人たちは麹嘉を推戴して王とした。麹嘉は、名字を霊鳳といい、金城郡榆中（甘粛省蘭州）の人であった。もともとは馬

儒の右長史であった。北魏の太和年間末（四九九）に即位した。麹嘉が死ぬと、息子の堅が即位した。（『魏書』巻一〇一高昌伝）

高昌の地は東西が三百里、南北が五百里である。国内には全部で城が十六ある。官職には、令尹が一人あり、これは中国の宰相に相当する。その次に公が二人おり、みな王子がその地位に就く。一つは交河公、一つは田地公である。その次が左右の衛である。その次に八人の長史がある。吏部、祠部、庫部、倉部、主客、礼部、民部、兵部などの長史である（文官）。その次が建武、威遠、陵江、殿中、伏波などの将軍である（武官）。次が八人の司馬で、長史がこれを補佐する。次が侍郎、校書郎、主簿、従事で、位階は次第に下り、諸々の物事を分割して司る。その次が省事で、導引（道案内）を専ら司る。大事は国王が決め、小事は世継ぎ（世子）と二人の公が状況に応じて決済する。評議記録するが、事案が終了すれば、それを破棄する。籍書のほかは、文書案件を長く保存することはない。官人には官位があるけれども、みな曹府（役所）がなく、ただ毎朝、宮廷に集って諸事を評議する。諸城にはそれぞれ戸曹（戸籍を司る部署）、水曹（水利を司る部署）、田曹（農業を司る部署）がある（地方官）。城ごとに中央から司馬、侍郎が派遣され、互いに検校を司らせる。かれらのことを城令とよぶ。[1] 服飾については、男性は胡服を着用し、女性はほとんど中国服と同じものを着用する。武器には弓矢、刀と楯、甲冑、槍がある。文字もまた中国と同じ漢字を使用し、あわせて胡書（ソグド文字）も併用する。『毛詩』『論語』『孝経』を有し、学校に、教師、弟子（生徒）を置いて教育する。漢文書籍を学習するときには、みなソグド語に訓読して理解する。税金は銀貨で徴収し、銀貨を持たないものは麻布を納める。刑法、風俗、婚姻、葬制は、中国と大同小異である。その土地は石礫が多い。気候は温暖で、穀物と麦は一年に二回収穫できる。養蚕に適し、果実（五果）が豊富である。羊刺（刺蜜）という草があり、その上に蜜が生じる。

麹嘉より以後、歴代の国王は北魏のために藩臣の役目を務めた。大統十四年（五四八）、西魏の文帝は詔をくだして

世子の玄喜を高昌王とした。恭帝二年（五五五）には、また田地公の茂に王位を継がせた。武成元年（五五九）、国王は使者を派遣して特産物を献上した。保定年間（五六一～五六五）の初め、また使者を派遣して朝貢した。

敦煌から高昌に向かう時、砂漠が多く、その道中、道筋を明示することができず、ただ人骨や獣骨、駄馬の糞を道しるべとする。また途中に魑魅魍魎や怪異が出現するので、キャラバン（商隊）は往来する時、多くが伊吾（ハミ）経由の路を利用するという。

注

（1）嶋崎昌一九七七a：二五三～三〇九。

鄯善（ローラン）

鄯善は、いにしえの楼蘭国である。東は長安から五千里の距離にある。都城の大きさは一里四方である。その土地は塩分を含む砂地が多く、水や草が少ない。北には白龍堆（クムターグ）を経る交通路がある。北魏の太武帝の時、沮渠安周に攻撃され、鄯善の王は西に走り且末（チェルチェン）に逃げた。[1] 西北には流砂が数百里あり、夏には熱風が吹き、旅人を悩ませる。熱風の到来は、ただ年老いたラクダだけが知る。そのラクダは熱風が来ると鳴いて知らせ、他のラクダらは集まり、身を寄せ合って立ち、口や鼻を砂の中に埋める。人はいつもそれを砂嵐の前兆として、絨毯で鼻と口を覆う。熱風は非常に速く、しばらくすると通り過ぎる。もし熱風の予防をしないと甚だ危険であり、倒れ死ぬことがある。（『魏書・北史』西域伝、且末国）。大統八年（五四二）、王の兄の鄯米が民を従えて降服した。

注

（1）『魏書』『北史』西域伝、且末国条に「真君三年（四四二）鄯善王比龍避沮渠安周之難、率国人之半奔且末、後役属鄯

善。」とあり、また鄯善国条に「無諱後謀渡流沙、遣其弟安周擊鄯善、王比龍恐懼欲降。」とやや詳しく記述されている。

焉耆（カラシャール）

焉耆国は白山（天山山脈）の南七十里にある。東は長安から五千八百里の距離にある。王の姓は龍で、前涼の張軌（通典によれば、張駿）が封じた（北史によれば、討った）龍熙の末裔であった。都城は二里四方である。国内には全部で九つの城があり、国は小さく民は貧しく、綱紀や法令はない。武器には弓、刀、甲冑、槍があった。婚姻は中国とほぼ同じで、死者はみな火葬に付す。服喪の期間は七日が満ちて終わる。男性はみな髪を切り（剪髪）、首飾りをつける。文字は婆羅門（インド）と同じ。その国の風俗は天神につかえ、また仏法も信仰する。二月八日と四月八日を最も重んずる。この日、この国の人々はみな仏教の教えに従い、斎戒し、善行を修める。気候は寒いが、田畑は肥沃である。穀物には稲・粟・豆・麦があり、家畜には駄馬・牛・羊がある。養蚕を行うが糸は作らず、ただ綿入れにあてる。人びとはブドウ酒を好尚し、音楽を愛好する。南は十餘里に海（ボステン湖）があり、魚・塩・蒲・葦が豊富である。保定四年（五六四）、王は使者を派遣して名馬を献上した。

亀茲（クチャ）

亀茲国は白山の南百七十里にある。東は長安から六千七百里の距離にある。王の姓は白で、後涼の呂光の立てた白震の後裔である。都城は五～六里四方である。刑法では、殺人を犯したものが死刑、人や物を略奪したものは片腕を断ち、片足を切断する。税金は、その人が所有する土地の広さに応じて徴収し、耕作地を持たないものは銀貨を税として納める。婚姻、葬制、風俗、物産は焉耆とほとんど同じである。ただ気候は少し暖かく、焉耆とは異なる。また細氈（糸の

細い毛織物）、麝皮（大鹿の皮）、氍毹、鐃沙、塩緑（石緑、天然の眼病薬）、雌黄（顔料、丹薬）、胡粉、良馬、封牛（コブウシ）などを産出する。東に輪臺があり、これは漢の貳師将軍の李広利によって全滅させられた所である（『漢書』巻六十一、李広利伝）。その南三百里のところに大きな河があり東に流れている。計戍水（キジル・タリム河）とよばれるが、これが黄河となる。保定元年（五六一）、王は使者を派遣して朝貢した。

于闐（ホータン）

于闐国は葱嶺（パミール）の北二百餘里のところにあり、東は長安から七千七百里の距離にある。都城は八～九里四方であり、国内には大きな城が五つ、小さな城が数十ある。その国の刑法では、殺人を犯したものは死刑、それ以外の罪はそれぞれその軽重に従って懲罰を加える。その他の風俗、物産は亀茲とほとんど同じである。習俗として仏法を重んじ、寺や塔、僧や尼が非常に多い。王は最も信心深く、斎会（僧衆を家に招待）を設けるときは、いつも必ず自ら水をまき、箒で掃き清め、食事を給する。城の南五十里の所には贊摩寺（tsarma）がある。[1] これは昔の羅漢比丘の比盧旃（vairocana 遍照）が、この国の王のために覆盆浮図（半球形の仏塔）を建立したところである。そこにある石の上には、その辟支佛（独覚）が足をのせた台があり、両足のあと（仏足跡）がいまでもなお残っている。高昌以西の諸国の人々は、その多くが深目で鼻が高いが、ただこの于闐一国だけが、容貌は胡（ソグド人）に全く似ておらず、中国人に非常に似ている。城の東二十里の所には大河があって北に流れており、樹枝水（ユルン・カーシュ）と号している。これが黄河となる。城の西十五里の所にも大河があり、達利水（カラ・カーシュ）と名づけられている。樹枝水とともに北に流れ、同じように計戍水（タリム河）に合流する。

建徳三年（五七四）、王は使者を派遣して名馬を献上した。

注

（1）贊摩寺の創建と比盧旃比丘については、ホータンの仏教初伝説話として、『大唐西域記』巻十二瞿薩旦那国条（水谷真成一九七一：三九六～三九七）、「宋雲の旅行記（『洛陽伽藍記』巻五、于闐条）」、チベット語文献の『于闐国史』（寺本婉雅一九六一：二三～二五、W. Rockhill 1884：230-248）などに記されている。

嚈噠（エフタル）

嚈噠国は大月氏の種族で、于闐の西方にある。東は長安から一万百里の距離にある。王の治所は抜底延城（バルフ）で、それがいわゆる（小）王舎城である。城は十餘里四方である。刑法、風俗は突厥とほぼ同じ。その習俗として兄弟はともに一人の妻を娶る（一妻多夫）。夫に兄弟がいない場合、その妻は一角の帽子をかぶり、もしも兄弟がいる場合、兄弟の数の多少に従って帽子に角を加える。この国の人々は凶悪で荒々しく、戦闘に長ける。于闐、安息（ペルシア）などの大小二十餘国がみな嚈噠に従属する。

大統十二年（五四六）、使者を派遣して特産物を献上した。西魏の廃帝二年（五五三）と明帝二年（五五八）のときに使者を派遣して朝貢した。その後、突厥に撃破されて部落は四散し、朝貢はついに途絶えた。

粟特（ソグド）

粟特国（ソグディアナの遊牧民）は葱嶺の西方にある。おそらく、いにしえの庵蔡（アラン）であろう。またの名を温那沙（フーナスタン）といい、大きな澤（アラル海）のほとりを根拠とし、康居（キルギス・ステップ）の西北にいる。保定四年（五六四）、王が使者を派遣して特産物を献上した。

安息（安国＝ブハラ）

安息国は葱嶺の西方にあり、治所は蔚捜城である。北は康居と、西は波斯（ペルシア）とそれぞれ隣接した。東は長安から一万七百五十里の距離にある。天和二年（五六七）、王は使者を派遣して朝貢した。

波斯（ペルシア）

波斯国（ササン朝ペルシア）は、大月氏の別種であり、治所は蘇利城（セレウキア）、漢代條支国（メソポタミア南部）の故地にあたる。東の長安から一万五千三百里の距離にある。都城は十余里四方で、戸数は十餘万、国王の姓は波斯氏である。王は金羊座に坐り、金花冠を戴き、錦袍と織成帔（毛織のショール）を着用し、それらはみな珍しい珠や宝石で装飾されている。その国の習俗では、男性は髪を切り（剪髪）、白い皮の帽子をかぶり、貫頭衣を着用する。貫頭衣の左右裾にはスリットが入る。みな巾帔（ショール）を持ち、そのふちは織り成されている。女性は大きな上衣（衫）に、大きな帔（うちかけ）を着用し、髪の先端をまげに結い、背中の後ろ側に髪をたらす。頭は金銀花で飾り、五色の珠で連ねた腕輪を上腕にまく。

国王は国内に小牙（別荘）を十餘所持つ。それは中国の離宮と同じである。毎年四月、王は外遊し、この小牙（別荘）で過ごし、十月になると都に帰還する。王が即位すると、諸王子の中から賢明なものを選び、ひそかにその子の名前を記して文庫の中に封印していれておく。諸王子と大臣はみな、その名前を知らない。王が亡くなると国人はともに文庫から書を取り出し、それを見て封書中に名を記されたものを、直ちに国王とする。他の諸王子は、それぞれ宮殿を出て、辺境の任地に赴く。兄弟はそれ以降、互いに顔をあわせることがない。国人は王のことを翳噴（shāhānshāh）

と号し、妃を防歩率（bānbishn）、王の諸子を殺野（shahryār）と呼ぶ。大官には摸胡壇（magupatān）があり、国内の獄訟を司り、泥忽汗（gandjvar）は庫蔵関禁を司り、地卑勃（dipīrān）は文書と庶務を司る。その次が遏羅訶地（argabadh）で、王の内事を司り、薩波勃（spāhbadh）は四方の兵馬を司り、その下にはみな属官がおり、事務を分担する。[1] 兵器には、甲冑、槍、円陣戦用の剣、弩、弓矢があり、戦争には騎象を前列に並べ、一頭の象ごとに百人が付き従う。刑法では、重罪のばあいは罪人を棒の先につるし、弓で射殺する。その次が投獄であり、新王が即位すると釈放される。罪の軽いものは、鼻そぎ、足きり、もしくは髪きりの刑に処され、みな髭を半分剃り落とされ、首に牌をつけさせられて、恥辱を受けさせる。盗みを犯したものは終身禁固の刑に処せられる。貴人の妻と姦通した場合、男は流刑に処され、女は耳と鼻を削がれる。税金は、所有する土地の多寡に応じて銀貨を納める。

その国の習俗は火祆神（ゾロアスター教）を信仰する。結婚の際には身分の貴賤を選ばない。だから、多くの夷狄の中では最も醜く汚らわしい。庶民の女は年が十歳以上になると、容色の美しいものを国王がこれを宮殿に入れて養い、勲功のあったものに分け与える。死者がでると、多くは屍を山に捨てる。喪に服する期間は一ヵ月である。城外には特別の集落があり、そこに住む人びとのみが葬儀をとり行うことができる。かれらは「不浄人」と呼ばれる。不浄人がもし城市に入る時は、みずから鈴を鳴らして人に知らせる。[2] 六月を年の初めの正月とし、七月七日と十二月一日を最も重んじる。その日、庶民以上のものは、それぞれ互いに示し合せて、宴会を設け音楽を演奏し、歓楽を尽くす。また毎年正月二十日には、それぞれが先祖や死者を祭る。

この国の気候は非常に暑く、家には氷室がある。この地は砂漠が多く、水を引いて灌漑する。五穀と禽獣は中国とだいたい同じであるが、ただ稲と黍ともちあわだけがない。この地は名馬とラクダを産し、富豪は数千頭を保有する。また、白象、ライオン、大鳥（ダチョウ）の卵、珍珠、離珠、頗黎（ガラス）、珊瑚、琥珀、瑠璃、瑪瑙、水晶、瑟瑟、

金、銀、鍮石（真鍮）、金剛（ダイヤモンド）、火斉（ルビー）、鑌鉄（はがね）、銅、錫、朱沙（朱）、水銀、綾、錦、白畳、苫（毛織物）、氍毹（毛織の敷物）、赤鼻皮（赤色の大鹿の皮）、それに薫六、鬱金（サフラン）・蘇合香・青木香などの香料、胡椒、蓽撥、石蜜、千年棗（ナツメヤシ）、香附子、訶梨勒（かりろく、薬用果実）、無食子（ドングリ）、塩緑（石緑、天然の眼病薬）、雌黄（顔料、丹薬）を産出する（『魏書』西域伝）。

西魏の廃帝二年（五五三）、王は使者を派遣して特産物を献上した。

注

（1）ササン朝ペルシアの行政組織については、Christensen 1944：97-140 参照。

（2）張小貴二〇〇二：六八～七五。

史臣（編者）が論評する。四夷が中国の災いとなることは久しく、とりわけ北狄（北方遊牧民族）が最も甚だしい。むかし嚴尤と班固の二人はともに周および秦、漢の対外政策が最善でなかったと考えた。賢者たちの博識の議論とはいえ、編者はかねてからそれに疑問をいだいている。(1)

そもそも昔から和平と戦乱が繰り返されることと、風俗に良し悪しの変遷があることは、中華も夷狄も変わりない。それゆえに夷狄（異民族）が道徳にそむき、仁義を捨て、傲慢になる風潮は歳ごとに拡大し、涇陽（甘粛省平涼県西方）にまで押し寄せ、ときには北地郡（寧夏回族自治区）に侵入し、かれらが内地にはびこる傾向は日ごとに深刻になってきた。そこにおいて金行（周）から水運（漢）へと五行の相生がおこり、中国と夷狄との雑居、風俗の混交が生じた。中国は夷狄民族の本情が偽善であることを知り、また夷狄は中国の利害得失を詳細に聞き知った。もし中国が夷狄と誓約を結ばず、こちらから出かけていって攻伐もせず、夷狄が来寇した時にのみ応戦し、夷狄が退却すれば、防御

を堅固にするということであれば、敵に余力が生じ、我が中国には平穏な年がなくなる。将兵は奔命に疲弊し、辺境は夷狄の侵攻に苦しむばかりで、霊台で戦争をやめ、仁徳と長寿を謳歌したくても、そのようなことがはたして可能であろうか。そのような策は秩宗大将軍（厳尤）の雅説や護軍（班固）の誠説であり、それは当時の状況にふさわしくとも、後世の世には通用しない。

だからこそ『易経』には「君子は吉凶のきざしを見て直ちに行動する」[2]と言い、『春秋左氏伝』は「君子は時勢を見て動く」[3]と言うのである。そもそも時は得失につながるもの、幾（きざし）は吉凶の由来するところである。まして中国の諸王朝には統一と乱世とが代わるがわる起り、夷狄の地には勢力の強弱があるばあいにおいては、夷狄を服従させるか、覊縻するにとどめるか、これと和親するか征伐するかは、時勢の状況に応じて変化を制し、物事のきざしを見て臨機応変にはかりごとを立てることにある。そうすればその政策には手抜かりがなく、はかりごとに良策が多くなり、人面獣心の夷狄が中華に服従するのも容易となる。また砂漠の北では、夷狄は霧散して何と遠くに姿をくらませることか。したがってどうして周、秦、漢、北魏、それぞれの対外政策の間に優劣があるといえようか。

注

（1）厳尤の北方遊牧民族に対する政策論は『漢書』巻九十四下、匈奴伝、および巻九十九中、下の王莽伝のなかに見える。班固の意見は『漢書』匈奴伝末に付せられた「贊曰（編者の論評）」にあり、班固は厳尤の主張を妥当とする。

（2）『易経』繋辞下に「君子見幾而作（君子は吉凶のきざしを見て行動する）」とある。

（3）『春秋左氏伝』隠公十一年に「相時而動（時勢を見て行動する）」とある。

天が覆い、地が載せる所は非常に大きく、また日が臨み、月が照らす所は非常に広い。そのことを考えると、万物のうちでは人間よりも禽獣のほうが多く、両儀（天地）の間では中国よりも外国のほうが大きい。鄒衍の説によると、詭怪（奇怪・不思議）の形跡は、まことに繁多であり、『山海経』を参照すれば、奇譎（いつわり）の言葉は一つどころではない。周公や孔子が出現したが、怪異については語らなかった。その是非は紛らわしく、弁ずる事はできない。秦の始皇帝は天下の民を駆使し、みだりに武力を用いて遠征し、漢の武帝は強盛な兵馬をもちいて、遠方の攻略に励んだ。匈奴はすでに（北に）退き、匈奴の地はすでに空虚となった。西方から天馬（汗血馬）が中国にやって来たが、中国の民は更に困窮した。これによってわかることは、雁海（雁門関北のバイカル湖）と（白）龍堆（タクラマカンの砂丘）は、天が中華と夷狄を隔てる境界であり、また炎方（灼熱の南方）と朔漠（北方の砂漠地帯）は、地が中国内地と外部とを限る境界であった。ましてや、いまの時代は秦や漢ではない。それなのに、野心は嬴氏（秦）や劉氏（漢）よりもはなはだしい。天道に背いて功績を求め、民力を尽くして欲望のままに行えば、それは顚墜の釁（転落のきざし）であり、もはや後戻りはできない。だから、先王たちは教えを設けて諸夏（中国）を内となし、夷狄を外としたのである。昔の哲人たちは規範を垂れ、徳を立てることを美事とし、国土を拡張することを卑しんだ。夏の禹王の足跡は広く東西に及んだけれども、けっして遠方の海や流砂の砂漠を越えることはなかった。『礼記』の王制には、「北から南に行く」とあるが、わずかに穴居の交趾（ベトナム）に言及するだけである。三古（五帝三王）の時代を通じて行われてきた道義は、どうして百代の後まで尊重しないでよいものか。

北周は喪乱の後を受け、戦争に明け暮れ、武功によって四方を定め、権道（臨機応変の方法）によって三辺を安んじた。しかし趙、魏（北斉）は、なお強硬である。そこで北周は北狄と婚姻を結んで和睦し、武庫と厩舎が満たされていなかったので、西戎と通好した。このようにして徳と刑が整備され、北周の名声は遠方に及んだ。粗布や氈裘（毛の皮

衣）を着た外国人が諸国から集り、胡人の商客が旗亭（はたご）に満ちた。東方の攻略では三呉の地（揚子江下流域）に及ばず、南方の巡行では百越との境界で止まったけれど、北周の国威が恭しく心服され、徳風教化がゆきわたる所は十分に広い。朝貢にやって来る四夷（異民族）については、今みな以下に記す。道の遠近や物産、風俗に関しては、前代の史書と比較して、時には異なるところがあるが、ここでは当時の記録を収録して、欠けている所を補うことにする。(1)

注

（1）以上の文章とほぼ同じものが、『北史』巻九十四、「四夷伝」の序に採用されている。

『隋書』西域伝と『周書』異域伝に関する参考文献とその略号

史料・旅行記に関する研究

Miller, Roy Andrew 1959 : *Accounts of western nations in the history of the Northern Chou dynasty*, University of California Press.

内田吟風一九七〇：「魏書西域伝原文考釈・上」『東洋史研究』第二九巻第一号。

内田吟風一九七一：「魏書西域伝原文考釈・中」『東洋史研究』第三〇巻第二・三号。

水谷真成一九七一：玄奘著、水谷真成訳『大唐西域記―中国古典文学大系二二』平凡社。

長沢和俊一九七一：『法顕伝・宋雲行記』平凡社（東洋文庫）。

内田吟風一九七二：「魏書西域伝原文考釈・下」『東洋史研究』第三一巻第三号。

山田信夫一九七二：「『周書』突厥伝訳注」『騎馬民族史2—正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）。
内田吟風一九七三：「『隋』裴矩撰『西域図記』遺文纂考」『藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集』乾。
長沢和俊一九七九：「韋節・杜行満の西使」『シルク・ロード史研究』国書刊行会。
内田吟風一九八〇：内田吟風編『中国正史西域伝の訳註』京都。
北村高一九八〇：「『隋書』巻八十三西域伝序・跋訳註稿」内田吟風編『中国正史西域伝の訳註』京都。
桑山正進一九九二：桑山正進編『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所。臨川書店一九九八。
張毅・張一純二〇〇〇：慧超原著・張毅箋釈、杜環原著、張一純箋注『往五天竺国伝箋釈・経行記箋注』中華書局。
余太山二〇〇五：『両漢魏晋南北朝正史西域伝要注』中華書局。
李錦繡・余太山二〇〇九：『『通典』西域文献要注』上海人民出版社。
小谷・菅沼二〇一〇：小谷仲男・菅沼愛語「『新唐書』西域伝訳注（一）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』九号。
小谷・菅沼二〇一一：小谷仲男・菅沼愛語「『新唐書』西域伝訳注（二）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』一〇号。

吐谷渾（とよくこん）

和田博徳一九五一：「吐谷渾と南北両朝との関係について」『史学』第二五巻第二号。
後藤勝一九五六：「吐谷渾に関する二、三の問題」『史潮』第五八号。
Molè, Gabriella 1970：*The T'u-yü-hun from the Northern Wei to the time of the five dynasties*, Roma.
佐藤長一九七八：『チベット歴史地理研究』岩波書店。

松田寿男一九八七ａ：「吐谷渾遣使考」『松田寿男著作集四・東西文化の交流二』六興出版。
松田寿男一九八七ｂ：「青海史論」『松田寿男著作集四・東西文化の交流二』六興出版。
周偉洲二〇〇六：『吐谷渾史』広西師範大学出版社。

高昌（トルファン）

嶋崎昌一九七七ａ：「麹氏高昌国官制考」『隋唐時代の東トゥルキスタン研究―高昌国史研究を中心として』東京大学出版会、二五三～三〇九頁。
嶋崎昌一九七七ｂ：「『隋書』高昌伝解説」『隋唐時代の東トゥルキスタン研究』東京大学出版会、三一一～三四〇頁。
呉震一九八一：「麹氏高昌国史索隠―従張雄夫婦墓志談起」『文物』一九八一年第一期。
關尾史郎一九九三：「「義和政変」前史―高昌国王麹伯雅の改革を中心として」『東洋史研究』第五二巻第二号。

康国（サマルカンド）

岡本孝一九八四：「ソグド王統攷―オ＝イ＝スミルノワ説批判を中心として」『東洋学報』第六五巻第三・四号。
吉田豊二〇一一：曽布川寛・吉田豊編『ソグド人の美術と言語』臨川書店。

亀茲（クチャ）

Lüders, Heinrich 1930：Weitere Beiträge zur Geschichte und Geographie von Ostturkestan. *Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Berlin, Kl phil- hist.*,Vol.42.
A. von Le Coq & E. Waldschmidt 1933：*Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*.VII, Berlin.

于闐（ホータン）

Rockhill, W. W. 1884：*The life of the Buddha*, London.

寺本婉雅一九二一：寺本婉雅訳『于闐国史』丁子屋書店。一九六一年に国書刊行会より復刻。
桑原隲蔵一九六八：「老子化胡経」『桑原隲蔵全集』第一巻、岩波書店。初出は『芸文』一（九）、一九一〇年。

曹国（イスティーカーン）

Henning, W. B. 1965： A Sogdian God, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 27：242-54.
林梅村一九九八：「中国境内出土帯銘文的波斯和中亜銀器」『漢唐西域与中国文明』文物出版社。
B. Marshak & F. Grenet 1998： Le mythe de Nana dans l'art de la Sogdiane, *Arts Asiatiques*, 53：5-18.
小谷仲男一九九七：「ソグドの神々とイスラム・アラブの侵攻」『西南アジア研究』四六号。
蔡鴻生一九九八：『唐代九姓胡与突厥文化』中華書局。

挹怛（エフタル）

小谷仲男一九六六：「バダフシャンにおける玄奘の旅行」（第四・五次イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊予報）『東方学報』第三七冊（三八九～四一一頁）。
Sims-Williams, N. 2000：*Bactrian Documents from Northern Afghanistan I：Legal and economic documents*. Oxford University Press.

波斯（ペルシア）

Christensen, Arthur 1944：*L'Iran sous les Sassanides*. Copenhague：97-140（chapitre II, L'organisation de l'empire）
岡田明憲一九八四：『ゾロアスター教の悪魔払い』平河出版社。
張小貴二〇〇二：「古波斯不浄人考」『中山大学学報（社会科学版）』二〇〇二年五期、六八～七五頁。

漕国（カーピシー）

桑山正進一九九〇：『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所。

附国（ブー、ピャーユル）

山口瑞鳳一九八三：『吐蕃王国成立史研究』岩波書店。